

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY



ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585

TEL&FAX : 0422 33 3320
<https://www.icualumni.com/>
E-mail : aaoffice@icualumni.com

ALUMNI NEWS
VOL.133 SEP.2020

新学長インタビュー 岩切正一郎氏 : p.2

「学びを止めるな！」コロナ禍中の春学期 : p.4

Think globally, act locally. 高田春奈氏 : p.16

A_People 入江杏氏 : p.17

お邪魔します！あのメジャー 半田淳子教授、藤井彰子准教授 : p.18

Special Interview

新学長インタビュー

新学長に就任した岩切正一郎氏 「コロナ禍でリベラルアーツは深化する」

4月1日、それまで教養学部長を務めていた岩切正一郎氏が、日比谷潤子氏の後を継いで新学長に就任した。

折しも新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が全国的に蔓延し、大学も緊急事態宣言に対応せざるを得なかった。

そんななか、学長に就任するにあたって何を考えていたのか、ICUのリベラルアーツ教育はどうなるのか、などについてインタビューし、

加えて日頃の活動であるフランス戯曲の翻訳活動などについても聞いた。

文：望月厚志(本誌)、杉岡隆(本誌) 翻訳：鈴木律(本誌) 写真：中島正之 Interview by Atsushi Mochizuki, Takashi Sugioka English Translation: Ritsu Suzuki Photo: Masayuki Nakajima

IWAKIRI, Shoichiro

1983年、東京大学文学部フランス語フランス文学専修卒業
1991年、東京大学大学院人文科学研究科仏語仏文学専攻博士課程満期退学
1993年、パリ第7大学テキスト・資料科学科第三課程修了(DEA)
1996年、国際基督教大学教養学部助教授
2007年、同 教授
2019年、同 教養学部長
2020年4月、同 学長

——就任早々、COVID-19対策に追われることになりました。3月から4月の学長就任の前後、どのようなことを考えていらしたのでしょうか。

岩切：2019年4月から今年の3月末まで、私は教養学部長を務めていました。ですから本来は、後任の学部長への引き継ぎの時期だったのです。3月は、春学期をどうするかを考える時期なんですね。そこへ、2月24日に政府の専門家会議が「今後1～2週間が瀬戸際」との見方を示し、2月27日には安倍晋三首相が全国の小・中・高校の休校要請を出しました。私たちは、もちろん新学長就任のお祝いムードとかはゼロで、私と同様にこの4月に着任したロバート・エスキルドセン学務副学長、溝口剛大学院部長、石生義人教養学部長、そのほか行政職の先生や、事務職の方々に加わっていただき、危機管理委員会を招集しました。そして部署横断的な実働組織「コロナ対策室」を設置しました。

卒業式も中止にしましたし、入学式も中止。そして、春学期の授業をどうするかをひたすら考えていました。3月12日というわりと早い時期に、春学期はオンライン授業にすると、危機管理委員会で決めました。当時いろいろ可能性はあって、他大学のように5月まで新学期を遅らせて始めるというようなことも検討しましたが、それでも事態は変わらないかもしれない。とにかく学年暦通り始めて、オンライン授業をやりたいと決定しました。

初めてだったので何をどう準備していけばいいのかもよく分からない。でも、海外の大学と結んでオンライン授業をするといった試みをすでに学内で行っていたので参考にしました。

——それまで、どのようなオンライン授業の取り組みがあったのですか。

岩切：一番規模が大きいのは、TP-COIL (Trans-Pacific Collaborative Online International Learning for the Multiculturalism and Conflict-Resilience) というプロジェクトです。東京外語大、青山学院大と連携し、カ

リフォルニア大学、南カリフォルニア大学、サンディエゴ州立大学など主に米国西海岸の大学と合同の授業をするというプロジェクトが立ち上がっていました。

他にはGlobal Challenge Forumという高大接続の取組みで国際政治学の毛利勝彦先生が、全国の高校生をネットワークで繋いで、あらかじめオンライン授業をして、オープンキャンパスの際に実際に集まってもらってディベート大会をすることを企画されていた。

教育学メジャーで遠隔授業やeラーニングなどITを使った授業を専門にしている先生もいらして、そういう先生方のご意見を聴いたりしながらシステムを整えていくということをしました。——現段階(6月10日のインタビュー時点)で、これまでやってきたこと、オンライン授業などについて、どう評価なさっていますか。

岩切：もちろん、学生全員へのアンケート調査結果はまだ出ていないのですが^{*}、学生サービス部のスタッフ経由などで学生の意見を聞いたりしています。最初は、オンライン授業でICUの授業の質が保証できるのかといった疑問も学生の中にはありました。今のところどうなのか尋ねると、先生方がさまざまな工夫をしてくれているので、クオリティは保証されていると学生は言ってくれているようです。

4月入学の新入生は入学式もなく新学期が始まってしまったのですが、ELA (English for Liberal Arts) が授業を少人数でやっているの、ICUの少人数教育を感じてもらえているのかなと思っています。

——世の中では、ウィズコロナとかアフターコロナの社会などと言われ、社会のパラダイムが変わってしまうとも言われています。ICUのリベラルアーツ教育はCOVID-19によって変質してしまうものなのでしょうか？

岩切：私は、変わらないと考えています。こういうのにも強いのがリベラルアーツだと思います。ICUはリベラルアーツで、かつ「対話と批判的思考」

が柱です。それがあからこそオンラインで授業ができたということもある。

ICUには「明日の大学」という言葉もあります。今見えている社会、人間、自然について、さらに深く理解が進んでいる状態が明日なんですね。ただその考える対象は今回のコロナ禍によってもいろいろ変わる。グローバル化というのは実は何だったのだろう。富の一極集中をどうするのか。人間の営みというのは自然と共存しているのか——とかですね。そういう課題にリベラルアーツは密接に結びついている。ひとつの狭い専門では解決がつかず、さまざまな分野の知恵を出し合って現在の状況を解決していく。それは、いろいろなメジャーがあるICUのリベラルアーツに似ています。ですから、変わらないと言うよりむしろ、コロナ禍によってICUの場合は深化するのではないのでしょうか。

新学長は脚本家？！

——それでは、COVID-19を離れて、岩切先生ご自身のことを伺いたいと思います。今までは、どういったご研究をなさっておられたのですか。

岩切：もともとはフランスの詩が専門です。ボードレールを中心に、フランスの近現代詩を研究しています。

——先生は、演劇の脚本も多く手がけられています。

岩切：脚本というか、厳密に言うと翻訳です。学生時代からの友人、笠松泰洋君が作曲家で、舞台音楽の第一人者でもあります。以前から笠松君と2人、私が台本を書いてオペラや朗読劇をやったりしていました。

その笠松君が蜷川幸雄さんの舞台『グリークス』の音楽を担当したんです。その後、蜷川さんがフランスの演劇をやりたいのだからいい翻訳家を知らないかと彼に聞いて、私を紹介してくれました。そうして初めて、松たか子さん主演の『ひばり』という戯曲の翻訳をしたのですが、この舞台(2007年)が大成功。同じ年に小栗旬さん主演の『カリギュラ』も担当しました。

この2つの翻訳で湯浅芳子賞という戯曲翻訳の賞も頂きました。これ以降、色々とお話を頂くようになりました。

この3月～4月には、イッセー尾形さん、小日向文世さん、大泉洋さんの3人が共演する舞台があるはずでした。幕が開いてまもなく、COVID-19の影響で中止になり、とても残念です。

——ご自身の詩集も出されていて、詩人でもいらっしゃるんですね。

岩切：はい。表現するのが好きなのだと思うんですね、いろんなかたちで。——今回、学長に就任なさって、抱負をお聞かせください。

岩切：やはりリベラルアーツという特徴のあるシステムを発信する方向を打ち出したいですね。文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業(SGU)に採択されて、日比谷前学長のご尽力で、中間報告ではSの評価を頂いている。それに続くことに取り組もうと思います。

今は、ICUでは教育改革・教育力向上・国際化の推進に軸をおいている。これに加えて、グローバルな環境の中で何を真に開発していくべきなのか。人間の存在をもう一度定義しなおす、文化・社会・生物における排除と包摂のシステムを総合的に研究するといった大きな主題に取り組みたい。ICUにはさまざまなメジャーがありますし、研究所もあるので、それらを有機的に組み合わせて、ICUとしての「世界のとらえ方」を研究・発信できないかなと考えています。

もうひとつ、JICUF(日本ICU財団)と連携を深めたい。JICUFはニューヨークにあって、国連本部も近いし、コロンビア大学も近くにある。日本から学生、職員、先生方を派遣して、ニューヨークでプログラムを作ったりできないかと考えています。

^{*} 7月にCenter for Teaching and Learningが集計したアンケートによると、オンライン用に授業内容を変えた先生が半数。学生は、講義資料がアップされ自分のペースで学べるのが良い反面、ずっと画面を見続けると疲れる、という意見が多い。他人の目を気にしなくて楽、という学生も少なくない。

Interview with the New ICU President

Pandemic to Deepen Liberal Arts Education

On April 1, professor Shoichiro Iwakiri was appointed ICU president to succeed professor Junko Hibiya. He had previously headed the College of Liberal Arts. At that moment, the novel coronavirus, Covid-19, was sweeping this country. ICU had to respond to the government's declaration of a state of emergency. Alumni News interviewed professor Iwakiri on his thoughts on assuming the presidency, the future of ICU's Liberal Arts education and translation of French plays, Iwakiri's long-standing area of expertise.



--- The topmost item on the agenda immediately after taking office was how to respond to the Covid-19 pandemic. What was going through your mind in those spring months?

Iwakiri: As dean of the College of Liberal Arts, from April 2019 to end March this year, ordinarily in that period I would have been briefing my successor. March would have been time to think about the spring term. But on February 24, the government's Novel Coronavirus Expert Meeting announced that the next week or fortnight would be critical. On February 27, Prime Minister Shinzo Abe announced the closure of all primary, middle and high schools. Amidst the cheerless mood that welcomed me as the new president, the emergency management committee was summoned chaired by myself, with vice president Robert Eskildsen, the newly appointed Graduate School dean Tsuyoshi Mizoguchi, College of Liberal Arts dean Yoshito Ishio, administrative faculty and ICU staff members. A Covid-19 task force, a cross-functional work team, was also put into action. The commencement and matriculation ceremonies were cancelled. After thinking long and hard about what to do with the spring term, the decision was made quite early on March 12 to put all classes online. The commit-

tee did study other possibilities. Like other universities, the start of the new term could have been postponed until May, although it was unclear whether the situation would improve by then. In any event, it was decided that the academic calendar would be followed and whole curriculum taught virtually.

As this was the first time to put all courses online, it was difficult to know what to do. But we could refer to the many instances of ICU cooperating with overseas universities.

--- What sort of online learning programs had been provided previously?

Iwakiri: The largest project is TP-COIL, Trans-Pacific Collaborative Online International Learning for Multiculturalism and Conflict Resilience. In conjunction with Tokyo University of Foreign Studies, Aoyama Gakuin University and West Coast institutions, such as University of California, University of Southern California, San Diego State University and others, joint courses are offered.

In addition, under the ICU Global Challenge Forum, professor Katsuhiko Mori, international relations, has networked with Japanese high schools to provide remote lessons and then invite students to debate at ICU's Open Campus. We were also helped in setting up the system by expert advice from the Education Department facul-

ty who specialize in information technology based remote education and e-learning.

--- At this juncture (Iwakiri was interviewed on June 10), how would you evaluate your own track record, particularly on remote education?

Iwakiri: Of course, survey results of the student body have yet to be collated, but feedback through the Student Services Division has told us that initially some students feared that education quality would deteriorate. Recently, thanks to faculty's creative efforts, they are telling us its caliber is fully maintained.

For the April students, the spring term started without the usual matriculation ceremony, but through the English for Liberal Arts, I do hope that the freshmen will get the feel for ICU's small class education.

--- In the post-coronavirus world, some are saying that the paradigm will change. Do you think the outbreak will alter ICU's Liberal Arts education?

Iwakiri: I believe that Liberal Arts education is resilient in such times and will remain unchanged. The pillars of ICU are twofold: Liberal Arts and "dialogue and critical thinking." These have made possible online learning.

ICU calls itself "university of tomorrow," meaning that our understanding of society, mankind and nature will improve in the future, compared to today. But the pandemic will alter what we think about. Such questions as: What was globalization? What should be done about the concentration of wealth? Can human activity really coexist with nature? Liberal Arts is closely intertwined with such issues. Problems that cannot be solved by a narrow speciality, are resolved by gathering the wisdom of various fields. This is very similar to Liberal Arts, where students can choose their major(s) from many. Thus, rather than not changing, I believe that the pandemic will deepen the Liberal Arts education at ICU.

Iwakiri is also a Playwright!

--- Leaving aside Covid-19, let me ask about yourself. What is your area of research?

Iwakiri: My expertise is in French poetry, in particular, Charles Baudelaire and other poets of the modern era.

--- You are also involved in writing for the theater.

Iwakiri: It is not quite scriptwriting, rather translation into Japanese. A friend from university days, Yasuhiro Kasamatsu is a composer and the foremost expert on theater music. We have collaborated in opera and dra-

IWAKIRI, Shoichiro

Graduated from Tokyo University, majoring in French language and literature 1983
Finished coursework for doctoral program, Tokyo University in 1991
Completed DEA, Diploma of Advanced Studies (doctoral course) at Paris 7 in 1993
Appointed associate professor, ICU in 1996
Promoted to professor in 2007
Assigned dean, College of Liberal Arts in 2019
Appointed ICU president, April 2020

matic recitation, with myself writing the libretto or scenario.

Yukio Ninagawa, the theater director, whom Kasamatsu was working with on "the Greeks," a marathon drama, asked if he knew of a good translator of French, in order to stage French plays. Kasamatsu introduced me to Ninagawa. In 2007, the first drama that I translated into Japanese was "The Lark" (Jean Anouilh), starring Takako Matsu, which was a big hit. The same year I also translated "Caligula" (Albert Camus), with Shun Oguri in the leading role. These two scripts brought me the Yoshiko Yusa Prize for overseas theater translated into Japanese. Offers have continued to come in ever since.

Back in March and April, rehearsals were taking place of a three man play, starring Issey Ogata, Fumiyo Kohinata and Yo Oizumi. Just as the curtain rose, the show had to shut down because of the pandemic. What a disappointment!

--- You have published your own collection of poems.

Iwakiri: Yes, I like to express myself in many ways.

--- What are your plans as ICU president?

Iwakiri: I would like to communicate more about the unique nature of ICU's Liberal Arts. Our university was included in the Top Global University Project (Super Global University) of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Under the previous president Hibiya's leadership, the highest "S" grade was given to ICU in the interim report. I must redouble these efforts.

In the College of Liberal Arts, educational reform, enhanced educational capacity and internationalization are the current focus. In addition, what can we develop for this global environment. I would like to try to redefine human existence and promote holistic research of subsumption and exclusion systems in culture, society and biology and other profound issues. ICU has such varied majors and research institutes, which could be linked organically to study and communicate how ICU is trying to comprehend the world.

Another thing I would like to do is to broaden cooperation with JICUF, Japan ICU Foundation. In New York, JICUF is located close to both the United Nations Headquarters and Columbia University. It should be possible to create a New York program, despatching students, faculty and staff.



大特集

「学びを止めるな！」 コロナ禍中の春学期

新型コロナウイルスの感染拡大により、ICUでも、卒業式、入学式など大学の節目となる行事はむろんのこと、春学期は大学の敷地に入ることすら禁止され、春学期を通して教室で授業が受けられないという前代未聞の難局をもたらした。しかし、ICUは全国の大学の中でも圧倒的に早くオンライン授業をスタートさせた。もちろん、実験などオンラインが代替手段になりえない授業もあったが、なんとか6月末の期末試験を迎えることができた。この「大学における新しい日常」に、教員、学生、大学職員はどう立ち向かったのか。関係者に話をうかがった。

文：新村敏雄、星川菜穂子 写真：望月厚志（キャンパス風景）、新村敏雄（Zoom画面）（すべて本誌）

日本における新型コロナウイルスの感染は、大型客船ダイヤモンド・プリンセス号での集団感染が確認された2月初旬以降、急激に広がるとともに注目度も高まった。大学では2月中に授業が終了し、学長の交代とともに執行部の顔ぶれも変わることが決まっていた時期だった。

2月27日に安倍晋三首相が唐突とも言える小中高の一斉休校要請を打ち出し、社会に動揺が走った。3月9日、大学職員の部長クラスと教員の幹部で構成される危機管理委員会は、日本人の寮生を実家へ戻すことなどを決定。さらに12日に開かれた大学幹部会は、春学期の授業をオンラインで実施すると決定した。ここから「ICUの教育」の真価が試される数カ月が動き出した。

オンライン化の最前線に立ったのは、学修・教育センター（CTL）とITセンターだ。技術的な検証から、実際の環境づくりまで、企画と運営を一手に引き受けた。お二人の方にお話をうかがった。



学修・教育センター（CTL）部長 小林智子さん（左）
ITセンター長代理 小松倫子さん

新型コロナウイルスに関連した国内とICUの動き

- 1月16日 国内初の感染者を確認
- 2月5日 ダイヤモンド・プリンセス号で感染を確認
- 2月27日 安倍首相、全国の小中高などに3月2日から春休みまで一斉臨時休校を要請
- 3月9日（ICUの）危機管理委員会開催**
- 3月11日 世界保健機関（WHO）、新型コロナウイルスを「パンデミック」と認定
- 3月12日（ICUの）幹部会、春学期をオンライン授業で行うと決定**

小所帯で乗り切った怒濤の日々

CTLは「多様な言語・学修背景をもった学生の学修を支援し、学生の学修に繋がる教育活動の継続的な改善の推進とための教職員の支援を行う」組織。たまたま3月中旬に英国オックスフォード大学から講師を2人招いて「英語で授業を教える手法」（English Medium Instruction、EMI）について1週間のワークショップを開催する予定だったが、コロナ感染拡大を受け、直前にオンライン開催となった。

「このとき、ICUからは6人の教員が、昼間はMoodle*を、夜はZoomを使って参加し、『MoodleとZoomで講義を受ける』という実地体験ができたことが、春学期の授業のオンライン化に取り組むうえで役に立ちました」（小林さん）

「春学期はオンライン授業をする」と決まってからは、ITセンターとも

連携しながら怒濤の日々が始まった。「3月はOxford EMI ワークショップを受講した先生方ともランチタイムなどにオンライン授業がどうなるか相談していました」（小林さん）

オンラインは同期型と非同期型がある。大学では非同期型はすでにMoodleを使っていた。同期型ツールは、小さな通信量で動くので学生の負担が少ない、との評価からZoomに決まった。

使い方についてはMoodle上にコースを作成し、オンラインツールの説明ビデオやマニュアルと、Moodleなどのツールの活用事例をウェビナーで解説するオンライン開催となった。

*Moodle 授業を支援するためのオンライン学習管理ツール(LMS)。教員が授業資料をアップロードしたり、学生が課題レポートをオンラインで提出・返却するなど、様々な便利な機能を備えている。

ただ、Zoomについては利用中に部外者が乱入するケースが報道され、セキュリティを心配する声が学内ユーザ

ーからも寄せられたことから「授業が始まるまでは、一つ一つ事例を調べたりしてそうしたアクシデントをどう防ぐか検証し、利用のガイドラインを作りました」（小松さん）

教員に対しては、学生のネットワーク環境が整うまでの2週間は同期型授業を行わずリーディング課題を与えるとともに、シラバスを見直し授業形態を明記するよう、大学側から通知があった。オンライン授業に関する質問については、CTLとITセンター、ヘルプデスクの窓口を一本化し共通のフォームを用意した。オンライン授業について詳しい教員もいたが、オンラインに慣れていない教員の熱意も極めて高く、たくさんの質問が寄せられた。また、同じ研究分野内外で、オンラインツールに詳しい教員がそうでない教員への活用支援を行う等、教員間での助け合いも見られた。「シラバスを書き直してください」との急な依頼にも快く応じてくれたという。

学生に対しては、本格的なオンライン授業開始前に新入生約630名に対してアンケートを実施。結果的には、パソコンなどの機材の準備が出来ていない新1年生は10人に満たず、通信に容量制限がある学生は5%弱、通信環境が全くない学生は数名程度だった。一方在校生の間では、「オンライン授業を受けるのにどの程度の回線容量があればいいのかわからず不安」との声

が3割以上にのぼったという。

オンラインの「本番」前は、オンライン授業がどの程度の規模になるか正確な状況が分からない中で、「想定される推奨環境を提示し、何かあったときの連絡窓口を作り、パソコンやポータブルWi-Fiを貸し出して」いざというときに備えたという。一般企業でもリモート勤務が広がり、他大学や一部の高校でもオンライン授業に踏み切ったところもあったことから、「ご家庭によっては家族全員がリモートで、親子兄弟の間で回線容量を取り合っていた例もありました」と、笑えない状況も起きていた。

そうやって教える側の態勢が整い、迎えた最初の関門は4月8日の履修登録。「短時間に3000人くらいがアクセスしてくると想定し、Moodleや履修登録システムのリソースは増強していた」ものの、登録スタートの午前9時ちょうどに学生が一斉にアクセスしてきた結果、履修登録システムではなく大学の入口となるポータルサイトで反応の遅延が生じてしまい、各システムに直接アクセスできるリンクを案内するなど、慌ただしい交通整理が必要となった。その後も、オンライン授業によるリソース不足には何度か直面したが、春学期は手持ちのリソースで何とか乗り切った。この夏休みには、秋学期の安定稼働のために、リソースを追加購入して更なる増強を行う予定だ。

4月下旬からいよいよ本格的なオンライン授業がスタートした。慣れない当初は小さなつまづきはあった。Zoomには、会議(=授業)が始まる前にログインした状態で先生の承認を待つための「待機室」という機能があるのだが、先生が学生の承認に失敗したことに気が付かず授業を始めてしまい、「待機室」に取り残される学生が出る、といったケースだ。

次の関門は、無料アカウントの制限。Zoom社からは日本国内の学校の休業への対策として、3月から無償でも時間制限なしで利用できるサービスが提供されたが、それも4月30日まで。5月からは40分の時間制限が復活してしまう上に、大学の授業のツールとして十分なセキュリティ設定を適用するためには有料の契約が至急必要だった。そこに「救世主」が現れた。ニューヨークの日本国際基督教大学財団(JICUF)が、1年間の有料アカウント費用負担を申し出てくれたのだ。「このように、ICUの学修活動を止めないために、学外からも多くの支援を受けられたことにも感謝します」

ICUだからこそその機動力

実は、CTLとITセンターのほか、他部署からの応援も含めた、インフラ整備のための「コロナ対策室」部隊は総勢10人に満たなかった。しかもみな、本来業務を抱えながらの取り組みとし

て動いてきた。どうしてこのようなことが可能だったのか。「ICUは小さな組織で顔見知りばかりでしたし、学部がひとつなので、400程のコースはまとめて見渡すことがぎりぎり可能でした」(小林さん、小松さん)。これが他の大学では、オンライン授業に対する学部間の認識の温度差があったりしてツール選択などの合意形成にも時間がかかっていたとみられる。

「小さな大学」の良さは教員とスタッフの距離の近さにも表れる。「オンライン化に伴う様々な課題を先生方と直接お話できることは、他の大学ではそんなに普通のことではないと思います」(小林さん)。他大学でも教えている非常勤講師の教員が「非常勤にまでこんなに情報がおりてくる大学は珍しい」と驚いていた、ということからもそれはうかがえよう。

春学期を振り返ってみると、オンラインの授業の良さが実感できた。

- 学生の授業への出席率が高く、反応がよく見える
- 教室での授業よりも Zoom のチャットの方が質問がしやすい
- 非同期型なら、授業の動画を繰り返し見ることができるのは、特に障害がある学生や開講言語が母国語でない学生にもメリット

理科系の実験の授業など、どうしてもオンラインではできないものもあるが、教員の間からも、「オンライン授業を今後もうまく活用していきたい」との声が寄せられているという。

オンライン化へのインフラ整備・運営の「中核」をCTLとITセンターが担う一方、できあがっていく環境をスムーズに実際の授業へと適用させていく「司令塔」的な役目を受け持ったのが、教養学部副部長の森木美恵上級准教授だ。



森木美恵 上級准教授
教養学部副部長(カリキュラム担当)

「全学でオンライン授業に取り組むと決まったあとの私の仕事は、非常勤講師(PTL)の先生方のケア、つまり、足並みをそろえることでした」と語る森木先生。大学の首脳陣、教員、そして事務方の3者を橋渡しする「調整役」を務めた。

最初にしたのは、春学期担当の先生方へのアンケート。①予定どおり②秋か冬学期に変更③キャンセル — の選択肢に対して約7割弱が①を選択してくれたが、「講習会はあるのか?」「やるとは言ったものの、自信はない」など、「不安もお持ちでした」。

コロナ前も学生に課題を出すのは

3月19日 学生のキャンパスへの入構禁止始まる

3月24日 春季卒業式中止、東京五輪・パラリンピックの延期決定

3月29日 志村けんさん死去

4月1日 春季入学式、中止

4月2日 世界の感染者が100万人突破

4月3日 政府、49カ国・地域からの入国拒否を決定

4月7日 7都府県を対象に緊急事態宣言

4月16日 緊急事態宣言を全国に拡大

Moodle経由のこともあったが、春学期が全面的にオンライン授業となり、その活用はこれまでより一層重要な「掲示板」のような位置づけとなった。そのため、「(課題などが書き込まれていない、など)あまりMoodleを活用されていない先生には『必要ならお手伝いしますよ』とこちらからお声をかけました」という。

貴重だった「助走期間」

そうは言っても、Zoomは誰もが初めてのツール。あるPTLの先生については、「慣れていないからこちらもちょっと心配でした」(森木先生)。そこで、授業初日にキャンパスに来ていただき、授業が始まる前に森木先生が学生役となり、教室でZoomを試演した。実際の画面での見え方やパワーポイントの資料の画面共有のやり方などを確認するためだ。ところがいざ授業が始まったら「滔々と話をされてすごく面白く、さすがだなと思いました」。

森木先生は、春学期の最初の2週間(4月9～22日)を「助走期間」と呼んでいた。フルでのオンライン授業の開始は4月23日からで、それまでは課題の本や資料を読んでもらったり、授業の最初の数十分だけZoomをつないだりだった。「結果として、この間に先生も生徒も、あわてることなくオンラインの準備を進められたので、『Wi-Fi環境が弱いから調整しなくちゃ』といった、実際に使ってみてわかる課題の調整をする時間がとれました」という。

ご自身も、ご主人とお子様(2人)全員が自宅で同じ時間帯に別々のZoomを使用しているということもあり、「家族の生活音が入ってしまうとか、配慮すべき点に気づきました」。

Moodleに録画をアップして学生が好きな時にみてもらおうと、せっせと学校に来ては録画を撮りためている先生もいた。熱心なのはありがたいことだが、自分で見て改善点に気が付けるため、「これじゃダメ。もう一回やり直し」と納得するまで撮り直しを重ねる結果、「なかなか終わらない方もいらっしゃいました」と笑う。

杞憂だった学生への心配

感心したのは学生の適応力の高さ。森木先生自身、授業で学生から少人数

の「小部屋」に分かれてディスカッションなどをするブレイクアウト・セッションを提案され、取り入れた。1年生のELAのWritingの授業に参加してみた際も、「とてもスムーズに進んでいたし、ブレイクアウト・セッションをあちこちのぞいても、誰もさぼってなどいなかった」そうだ。「森木先生、初めまして」と気を使って挨拶してくれる学生もいたという。

学生からしたら、コンテンツがしかるべき場所にちゃんとあれば、それがオンラインだからといって問題にはならない。問題があるとしたら、コンテンツが充実していないことであり、「学生はこちらが思ったほど混乱していませんでした」。

学生はサークル勧誘にもZoomを使っていた。ただ、Zoomを見るにはその会議に登録する必要があるが、入らないかもしれないサークルのZoomに事前登録はしづらい。そこで、勧誘の映像をYouTubeで配信していたとも耳にした。これなら登録なしで見ることができるからで、柔軟な対応と気配りに「さすが」と思ったそうだ。

オンラインの長所と副産物

パソコンの狭い画面を通して行われるオンライン授業だが、「意外と発言がしやすい」という意見も聞かれたという。森木先生もZoomのチャット機能(質問やコメントをテキストで入力し画面の脇に表示させる)が気に入っているそうだ。「私、結構な勢いで話すので、学生も途中でさえぎって質問しづらいらしいのですが、チャットで質問してくれると、横目でそれを見ながらいいタイミングで答えられますから」。対面の授業で質問すると授業がいったん止まるため物理的に難しいが、チャットでいい質問が出ると、それを授業に取り込んでいける。森木先生はそれを「目に見える双方向性」と呼んだ。「同じ場にいらなくても双方向性は達成できるし、同じ場にいたからといってできることも限らないです」

オンライン化の「副産物」もある。「何人かの先生たちは今年の1年生は従来の1年生よりPCの使用能力が格段に上がったと言っていました。ものすごく使うから」。デジタルネイティブといっても、学生のPCリテラシーはここ数年落ちているように森木先生は感じているという。「全部スマホや

タッチパネルでできちゃうから、逆にPCの仕組みを知らないんです。たとえば、授業で学生にパワーポイントのファイルをメールに添付して送ってくださいと言っても、添付の意味がわからない、といった具合だ。両手でキーボードをタイピングできない学生も結構いるとのこと。

オンライン化を成功に導いたもの

春学期の授業のオンライン化で森木先生が改めて感銘を受けたことがある。誰かがみんなの尻をたたかなくとも、「ICUの職員の方たちは、それぞれの部署がやるべきこと、その先に必要なことを見越したうえでどんどん動いてくださった。本当に優秀なんだと思ったし、非常に頼もしかったです」。

たとえば履修登録の日にアクセスが集中してポータルサイトが2時間ぐらい落ちてしまったが、ITセンターがすぐ対応して復活、さらにWebサイトに現状がどうなっているかの説明をアップしてくれて助かったという。

コロナでやむなく閉鎖した図書館では、学生1人につき学期中に5冊まで宅配便で配送するサービスを提供したが、これも上からの指示があったわけではなく、図書館スタッフの独自判断による対応だった。さらに森木先生を感激させたのは、配送を依頼してきた学生のメール。「お手数をおかけします。こんなときにこうしてくださって感謝します」と書かれていたと図書館スタッフから聞き、「図書館が自主的に動いてくれたことを、学生も当然の権利と思わずにお礼の言葉を添えることが嬉しく感じられたという。

「こうしたことは、ICUという共同体が引き継いでいる何か目に見えない志のようなものがあるのでしょうか。実際に対面していなくても、学生や1年生にはそうした雰囲気何かしら伝わったのではないかという実感があります。それがなかったら、今回のオンライン化は難しかったのではないかと思います」

もっとも大変だったのは、新1年生ではないだろうか。感染拡大を防止するため、キャンパスは限られた人しか入れなくなり、入学式も流れてしまったからだ。結局春学期は一度もキャンパスを見ることができなかった。



菊池笑さん(新1年生)

菊池笑さんはコロナがなければ3月下旬から銀杏寮でICUでの生活を始めるはずだった。しかし、入試合格から

ほどなく、授業はオンラインで行うとの連絡があり、4月1日の入学式も中止。思い描いていた東京での生活はお預けとなった。取材はZoomで北海道・旭川のご自宅に「お邪魔」した。

「履修登録はちょっと戸惑いましたが、事前にメールでご説明もありましたし、寮の先輩の皆さんやアドバイザーの那須敬教授からいろいろなアドバイスをいただき、無事登録できました」と語る。銀杏寮には1年生10人の入寮が決まっていたが、先輩がチャットアプリのLINEでグループを作って、入学したのに寮に来ることができない菊池さんのような新入生に寮の情報を提供してくれた。

「困った」はなかったオンライン

1年生の必修科目ELAはStream3(4段階に分かれる英語習熟度別グループのうち、平均的な英語力を持つグループ)でスタート。このほか、西洋史、哲学、PEとヘルスサイエンスを登録し、4月23日から実際のオンライン授業が始まった。PE? 「はい、オンラインでやります。自分の部屋で動ける範囲でストレッチなどを。ジャンプしたりはできませんけど(笑)」

ELAはオンラインになじみやすいようだ。専用のテキスト(新1年生の自宅に郵送された)があり、Writing、Reading、Speaking & Listeningと多角的に鍛えられる構成になっている。「論文を読んで内容を理解したら、クラスの中で(オンラインで)ディスカッションをして更に理解を深める」という進め方をしている。オンラインでのディスカッションはWritingでもある。書いたものをセクションメイトと交換して意見を述べ合うのだ。「毎日2時間はELAの授業でした」

西洋史や哲学の授業ではMoodleも併用し、課題提出、資料の情報、授業で使ったスライドなどの教材、授業終了後に記入するコメントシートなどをMoodle経由で確認、閲覧、提出した。哲学の授業は「質問コーナー」があり、気軽に疑問を解消できる場が用意されていた。

とはいえ、そうした授業形態や「学生生活」に慣れたと感ぜられるようになったのは5月に入ってから。

「『オンラインだから困った』と感じたことはありません。対面と同じように授業を受けられるし、グループディスカッションも普通にやれますし」と菊池さん。ただ、図書館は使えないので、レポートを作成するのに必要な課題図書は、結局購入した。また、終日パソコンの前で過ごすため、どうしても体が固まってしまうがちで、「ランニングしたり縄跳びをしたりして意識して体を動かすようにしました」という。冬場なら旭川の自宅から車で10分のところにあるスキー場に行けるそう。



セクションメイトとは、ブレイクアウト・セッションで宿題が出たらZoomやLINEで「助け合っています」。オンラインで顔合わせから始めて、期の途中からは毎週日曜日に勉強などの話をするようになっている。

サークルも、オンラインでの活動紹介に参加してみた。「ラクロスに興味があるので、インスタグラムやLINEにある部のアカウントに登録しました」。5月にはZoomで交流会があり、スティックなどの道具を自宅に送ってもらったそうだ。「7月と9月に、体験会について説明があるので、そちらにも参加してみようと思います」

春学期はこうして終了した。秋学期から対面授業ができることになれば8月末ぐらいに寮に入れる見通し。お父様は東京に単身赴任中だそうで、東京での生活ができることになれば、準備の面では心強い。「夏休みの間にELAの宿題で『ライ麦畑でつかまえて』を読んでおかないといけないんです」とのこと。半年近く遅れたキャンパスでの生活、リアルなセクションメイトとの対面が、今から待ち遠しい。

海外の大学に留学していた学生にとっても、コロナのパンデミックは大きな打撃となった。留学期間満了前に帰国せざるを得なくなったからだ。



竹内葉々子さん(新4年生)(写真: Bruce Ong)

竹内さんはコロナ禍が世界的に急拡大し始めたとき、交換留学でフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学に在籍していた。フィリピンでは感染者が10人に達した3月9日、ドゥテルテ大統領が「公衆衛生の緊急事態」を宣言した。「そのころから教室での授業がなくなり、オンラインへの移行が始まりましたが、先生方の間でも運営方針が統一されていなくて、生徒には困惑と不満が広がりました」

ロックダウンで帰国を決意

まもなく、4月初旬には学期を終了させるとの大学の方針が決まり、5月に予定されていた期末試験もなくなり、履修していた科目の評価はAからDまでではなく、一律、「Pass」がつくことになった。この間にも、マニラ首都圏は3月15日からのロックダウン(都市封鎖)が決まり、日本大使館から「3日以内に出ないとマニラから出られなくなる」との連絡も入った。14日時点で、フィリピンの新型コロナウイルスの感染者98人・死者8人だった。

「当初はフィリピンに残るつもりでしたが、親に連絡して相談し、帰国を決めました」。唯一まだ日本行きが飛んでいたフィリピン航空の「ふだんの往復料金の6倍以上もする片道チケット」をなんとか入手、19日に成田に到着したが、「当時の日本はまだ緊張感もなくのんびりして見えて、フィリピンとの差に驚きました」。

竹内さんは開発学がメジャー。春学期は2週に1回、卒論指導を受ける大森佐和上級准教授のゼミに参加したほかは「政策科学・政治学調査法」という授業を聴講した。いずれもオンラインだ。ゼミでは全員同時に参加することもあれば、2人ぐらいずつに分かれてのブレイクアウト・セッションで自分が関心があるトピックについて議論することもある。聴講している授業ではMoodleに課題図書の1章がアップされ、それを要約したうえでオンラインでのディスカッションとプレゼンに臨む。来年度は、「5年プログラム」(3年冬学期までの成績が一定以上ならICUの大学院に推薦を受けられ、4年の秋学期から院の授業も履修でき、1年で院を卒業できる)で院に進むので、それも意識した学習だ。

また、デジタルマーケティングのコンサルティング会社でインターンも始めた。SNSへの投稿の企画や分析をまかされ、週1回はオンラインで進捗を確認するミーティングがある。

中断で終わった留学

しかしそうしたペースをつかむまでは、葛藤もあった。マニラ首都圏のロックダウンでフィリピン人の友人は実家に帰省するなど散りぢりになり、自身もあわただしい帰国で、お別れの挨拶

捗をする時間すら満足に取れなかったことなどから、「帰国直後は精神的にちょっとネガティブになり、大変でした」という。救われたのは、聴講した授業の課題の大きさに圧倒され、気が紛れたことだ。

留学中は2019年8月から現地のコンドミニアムを借り、勉強はもちろんのこと、留学前から部活動でやっていたアルティメット(7人制のフライングディスク競技)を現地でも続けるなど、頑張ってきたフィリピンでの生活。友人の家に遊びに行くと、必ず家政婦さんと運転手がいることに慣れるまでに時間がかかったことなど、貴重な経験だった。

現地で一緒に「開発研究」を学んでいた友人たちは、経済的に恵まれた家庭の出身が多く、当初は「どうして開発研究を専攻するのだろうか?」と不思議だった。一緒に過ごして行く中でだんだんわかったのは、「彼ら彼女らは視点が国外を向いていたり、社会貢献をしたい、という理由から開発を選択した」ということ。志をともにする友人たちがいるフィリピンだが、「留学生として戻ることはもうないと思う」と無念さをにじませた。

アルティメットは例年9月に学生の地区大会と全国大会が開催される。ICUは全国大会の常連だが、コロナの影響で開催は微妙だ。

次に、教員サイドはオンライン授業にどう取り組んでいったのか。



布柴達男教授
教養学部アーツ・サイエンス学科
(写真提供: 大学パブリックリレーションズ・オフィス)

「オンラインで授業をやってほしい、と大学側から言われたのは3月半ば」と振り返る布柴先生。「血の気が引く思いでした」。すぐさまITセンターやCTLに駆け込んで、Zoomの使い方

から教えてもらったという。

3月19日にはキャンパスへの入構が禁止され、新1年生は入学式もないまま「通学せず自宅で授業を受ける」学生生活がスタートした。新入生オリエンテーションでのアドバイザーの先生との対面もオンラインとなり、「その日は午前と午後に3時間ずつ、Zoomをつなぎっぱなしにして、新入生といろいろ話をしました。午前も午後も来ている学生もいましたね」。

ところが、4月9日からの授業開始直前になって「パソコンなどが準備できていない学生がいないかサーベイするので、オンライン授業のスタートは2週間遅らせてください」との指示がきた。結局、週3コマ×2週分の授業は、Moodle経由での課題提出に切り替え、オンラインでの1回目の授業は4月24日となった。

布柴先生が担当する一般教育科目「環境研究」の履修学生数は150人。新1年生も60人ほど、また一時帰国していたがコロナのために日本に戻れなくなってカリフォルニア、シンガポール、香港から履修した学生もいた。毎回、定時(11時30分)に始まる授業を学生も自宅からリアルタイムで受ける、「同期型」のオンライン授業だ。

環境問題は広範な分野に関係してくるので、履修する学生も多角的視点が求められる。この科目は、講義とグループプロジェクトからなり、グループプロジェクトでは履修生が興味あるテーマごとに6人ずつ25のグループに分かれ、探求を進めていく。環境問題を「自分とのつながりで考え」たうえで、選択したテーマの「解決に向け、自分たちがキャンパスでできること」を提案することがゴール。初回の授業で興味のあるテーマを3つ挙げてもらうと、3年ぐらい前までは、温暖化のような「地球レベル」の大きなトピックが多かったが、ここ1、2年は食品ロス、ゴミ、マイクロプラスチックによる海洋汚染など、身近な問題が増えてきているようだ。

また、この授業をきっかけに学内にも変化が起きた例もある。ペットボ

- 4月18日 日本の感染者が1万人を突破
- 5月4日 緊急事態宣言を全国一斉に5月末まで延長
- 5月25日 東京都が緊急事態宣言を解除
- 6月17日 **春学期終了**
- 6月30日 **夏季卒業式 中止**
- 8月20日 **秋学期授業予備登録**
- 9月7日ごろ **秋学期授業開始**

トルの消費を減らすためにもっと「マイタンブラー(水筒)」を持ち歩こう、と提案した学生が、「でも本館には安心して飲める水をタンブラーに補給できる場所がない」ことに気がついた。そこで「本館に給水器の設置を」と署名を集め大学に交渉、最終的に設置にこぎつけたのだ。

例年であれば、選択した課題の解決策を期末に「ポスターセッション」でプレゼンするが、今年はオンライン授業になったため、履修生が一堂に会してのセッションのかわりに、Zoomでプレゼンすることになった。

「現場」からオンライン授業

オンラインで授業の幅が広がった面もあった。考古学の先生に「考古学で見る環境適応と文化崩壊」というテーマでキャンパス内の遺跡発掘の現場から作業を中継しながら講義をしてもらったときは、学生たちは食い入るように画面を見ていたという。「授業が終わった後もなかなかZoomから抜けず、チャットで質問が飛び交い、結局20分延長で質問に答えたり追加のお話をしていただきました」(布柴先生)。対面の授業なら教室で資料を見せながらの講義となるが、講師が現場に飛び出すのだから臨場感があり、大いに刺激を受けたようだ。

学期の最後に「ポスターセッション」の代わりとなるグループごとのプレゼンテーションを、布柴先生のご好意で拝聴させていただけた。6人のグループが2人ずつペアを組み、「倫理的消費とは」「プラスチック削減は本当に良いことか」「フィリピンのゴミ問題を解決するには」など自分たちで

決めたテーマについて発表する。パワーポイントなどで作成した資料を画面共有し、プレゼンから質疑応答まで含めて20分の枠の中で進めていくのだ。

ポスターセッションを見たことがないので比較はできないが、どのペアのプレゼンもよく練られ、解決策の提案などまで展開し、感心してしまった。質問もよく出ていた。ポスターなら物理的スペースの制約があると思うが、オンラインなら発表資料は豊富に用意できるし、タブレット画面で聞いているうちに、小さな教室で発表を聞いているような、親密で集中した雰囲気を感じて不思議な気持ちになった。

布柴先生が他大学の教授などから聞いた限りでは、オンライン化を決めた大学でもゴールデンウィーク明けから開始したところも多かったようだ。背景として推測されるのは、ICUに比べて学校側が学生を把握しきれていないとみられること。メール連絡をしても、学生からの返信が半分に満たない例もあったそうだ。

振り返ってみると「学生たちはこのある種『異常事態』の中でも前向きで、受け身ではなく、充実した授業にしたいと主体的でしたし、ちゃんと授業が成り立っていることに『感謝している』とまで言ってくれました」と布柴先生。

その学生たちの声を紹介しよう。「個人的には授業のクオリティが下がったと感じることなくとも満足感のある春学期の学びでした。

非同期型の授業は、授業でわからなかった部分を何回も聞き返せたり、1.2倍速で再生したりできて、授業全体への満足感につながりました。

「教育」という財産を、お孫さまに贈りませんか。

教育資金贈与信託 (愛称:孫への想い)



「教育資金贈与信託(愛称:孫への想い)」は、30歳未満のお孫さま等への教育資金として当社へお預け入れいただき、当社がお孫さま等からの払出請求に基づき、教育資金をお支払いする商品です。

- 5,000円からお申し込みいただけます。
- 贈与を受ける方は、30歳未満のお子さま、お孫さまのほか、ひ孫さまも対象になります。

お申し込みは2021年3月24日まで

<p>特長1</p> <p>教育資金としてしっかり管理</p> <p>贈与した資金は用途が教育資金に限定されるので安心です。</p>	<p>特長2</p> <p>1,500万円まで非課税で贈与</p> <p>【対象例】</p> <p>学校等</p> <p>そのうち学校等以外へのお支払いは500万円まで</p> <p>学習塾・そろばん 水泳・野球 ピアノ・絵画 等</p>	<p>特長3</p> <p>無料!</p> <p>管理料</p> <p>払出手数料</p>
---	--	--

お問い合わせ・資料のご請求は

0120-988-494

受付時間 平日9:00~17:00(土・日・祝日および12/31~1/3はご利用いただけません)

孫への想い 検索

お問い合わせの際は「アラムナイニュースを見た」とお伝えください。

その人を信じて、その人に託す。 Meet The Trust Bank





同期型の授業では、オンラインだからと言ってコミュニケーションに困ることはなく、初めて話す人たち同士でもとても円滑にブレイクアウト・セッションで議論できました。授業内でディスカッションの物足りなさを感じることは少なかったように思います。お互いICU生だからちゃんと対話することができるという信頼感があったと感じました。

今後も続いて欲しいと思ったのはコメントシート(学生が授業を通してどのようなことを学んだのかや質問などを書く。教員とのコミュニケーションツール)のオンライン提出です。これまでは、紙に書いて授業後に時間のないうちで提出することが多かったのですが、オンラインでは内容を整理してから提出できます。また、自分が何を書いたのかいつでも見ることができるので、期末レポートなどを書く際に内容を振り返ったりテーマを決める際にも役立ちました」

もうお一人。

「フィリピンのゴミ問題について調べうちに、実際にボランティアをしたいと思って申し込んでみました。コロナでなかなか海外に出るのは難しいと思いますが、リモートでフィリピンのゴミ問題や教育問題に貢献できたらいいなと思っております。

『環境研究』では、教授方の訪問授業(野川公園や酒蔵など)がとても新鮮で面白かったです。実際に自分が行って学んでいるようで、毎回その授業の内容について好奇心がそられました。オンライン授業が終わってしまっても、このような授業形態は導入していただきたいほどです。

他の生徒にも聞いたところ、『オンラインのプレゼンテーションは普通のプレゼンテーションに比べて緊張しなかったから導入してほしい』『オンライン授業によって通学時間がなくなったことで楽になった』などの意見が多かったです。

一部には反対意見もありましたが、私が聞いた学生はほとんどオンライン授業に賛成で、続けてほしいと言っていました。そう思えるのは、教授方のおかげです。ありがとうございます」

一般教育科目「音楽と社会」を開講したギラン教授にもお話をうかがえた。準備にもう少し時間が取れたら良かった。

だが、オンライン授業のツールの優れた面に気づけたことが収穫だった、という。



マット・ギラン教授 (Prof. Matthew Gillan)
教養学部 アーツ・サイエンス学科

「大変だったが必要なことはできた」

ギラン教授の授業は「人間にとって音楽が持つ意味を理解するための様々な視点の可能性を検討し、民族音楽を学際的関心および総合的研究のパーспекティブのなかに置いて考える」もの。受講生は95人。新1年生も8人履修していた。

コロナ禍は、ライブやコンサート、小規模な発表会まで、音楽界にも広く、かつ甚大な影響を及ぼしている。そうした中、中止ばかりでなく、オンラインでの演奏に活路を見出そうとするオーケストラがあったり、コロナに負けずにがんばっていこうという歌が作られたりと、「前を向こう」という動きも内外で出ており、「授業の中でも事例としていろいろ取り上げました」。

毎年春学期に出している科目だが、「今年は進め方を完全に変えました」という。週3コマの授業は同期型と非同期型を併用してすべてオンラインで進めた。Zoomを使ってリアルタイムで講義する場合、Zoomのブレイクアウト・セッションとレポートをセットにする場合、そしてギラン教授が自身の講義を録画し、ビデオとして見せる場合だ。ビデオでは音楽と健康に関する課題図書を説明したものを録画した。「例年でも授業の準備はもちろん時間をかけていたけれど、今年はそのビデオを撮るのに1回分で数時間かかることもあったから、ちょっと大変だった」そうだ。

Moodleにはとても満足しているとのこと。チャット機能は「質問でもレポートの提出でも、学生が都合のよい時間に入力できるから、柔軟に使える」し、nativeの学生とnon-nativeの学生がディスカッションする際も、「リアル」の教室に比べたら「時間をかけて進められることが利点」だからだ。

全体としては、「大変ではあったけれど、必要なことはできた」と評価する。対面での授業との違いは、パワーポイントを共有したりしながら進めていくので、パソコン画面に同時に表示できる学生は6~8人が限度となり、「アイコンタクトをすとか、教室内を歩き回って学生の理解度を確認する、といったことはできず、学生の反応が見えにくいことも残念に感じました」と指摘する。あらかじめ録画を用意する手法は今後も使いたいそうだ。「自分の録画を自分でみるのはあまり好きではないけれどね」と笑う。

ちょっと困ったのは、カリフォルニアとオランダから授業に参加した学生が、時差の関係で苦労したこと。また、ギラン先生は「Moodleは以前から使っていたから慣れていたけれど、Zoom、特にブレイクアウト・セッション機能は初めてだった。録画機能も、はじめのころは撮ったつもりが撮れていなかったこともあった」と振り返る。

寮生は実家に戻されたが、海外からの留学生は様々な理由から、そうはいかなかった。ドイツ出身の大学院生、Lauさんにお話を聞いた。



Lau, Sai Kiet Nikiさん(留学生、寮生)

Lauさんは両親が香港とマレーシア出身のドイツ人。2018年9月からICUの大学院に在籍し、樫寮に住んでいた(卒業に伴い6月末で退寮)。専攻は公共政策でアドバイザーはアーツ・サイエンス学科のクリストファー・ボンディー(BONDY, Christopher)上級准教授。修士論文のテーマは「部落問題に関する社会運動組織の分析」。

日本についてはドイツの学部時代に興味を持ったという。2015年から16年にかけて東京学芸大学に留学し、国分寺に住んでいたため、三鷹のICU

は環境としてもなじみやすかったようだ。ドイツで残念ながら差別にあった経験から、学芸大では日本の「社会的マイノリティ」について勉強したという。ドイツの実家はフランスとの国境に近いドイツ南西部にあるビュール(Bühl)市という人口3万人ほどの町で、両親から聞いたところでは「4月に入ってスイスから新型コロナウイルスの感染が入ってきた」という。

卒論、入国制限で寮に残る

寮生はコロナ感染の拡大とオンライン授業決定を受けて、それぞれの実家へ戻ることになったが、Lauさんは卒業を控え、論文執筆が佳境に入るところだったうえ、ドイツは3月中旬以降、海外からの入国者を厳しく制限する措置を取り始めていた。

「寮の7階が院生が入ったフロアで、3月に入構禁止措置と日本人学生の一時的退寮が決まったあとも、15人ほどが残っていました。万一感染したらどこへ行ったらいいのかという、コロナウイルスそのものへの恐怖感に加えて、卒業までの手続きがどうなるのかなど、さまざまな心配事が一度に押し寄せてきたから、みんな困惑していました」と振り返る。

ただ、大学側がそうした疑問について説明してくれたし、アドバイザーとは毎週のように会っていたので、修士論文の執筆は着実に進めることができた。「必要な時以外は外出しないように、と言いつ渡されていましたが、大学食堂は時間を短縮して開いていた(11~15時)し、週1、2回はバックパックを持って自転車で買い物にも行きました」

最後の最後で大変な思いをすることになったICUでの生活だが、この2年間は「楽しかった。素晴らしい先生や友人に出会えたし、ICUを選んだことは正しい選択でした」と満足している。いったんドイツに帰国するが、日本の研究は続けると決めている。そして近いうちにまた日本に戻ってくる計画だという。そのためにも、早くコロナ禍が収束してほしいと願っている。

愛情たっぷり
ICU卒業生がやる
が子で真の油そば屋

油そば
武蔵野アブラ学会

あの日度おなじみのアブラ学会が

楽天通販始めました

みんなと美味しさ95点!

たくさん注文待ってます!

QRコード読んでね!
栄養満点だよ

代表取締役 木村考宏 03

代表取締役 角幡陽平 03

楽天サイト

クラウドファンディングを通じた市民社会の実現

新型コロナウイルスの感染拡大により、インターネットを介して不特定多数の人々から資金を調達する「クラウドファンディング(CF)」の需要が高まっている。格差や分断が浮き彫りになる社会において、CFを通していかに支援の輪を広げるのか。社会課題解決に特化したCFプラットフォームの代表取締役を務める酒向萌実(60 ID16)さんからお話をうかがった。

文:水野愛子(本誌) 滝沢貴大(本誌) 写真:GoodMorning公式Webサイト



クラウドファンディングを通じた社会課題解決とは

— GoodMorningの社長に就任した経緯を教えてください。

酒向: ICUを卒業後、アパレル系企業に就職しましたが、その年の年末に退職、翌年1月にCAMPFIREに入社しました。2016年10月にCAMPFIREが「GoodMorning」という社会課題解決を専門に扱うCFサービスを始め、そのチームに参加する形で転職しました。

1年半ほど、立ち上げた上司のもとでプロジェクトのサポートなどに携わり、2018年からGoodMorningのチームリーダーになりました。

GoodMorningの領域である「社会課題解決」には高いニーズがあり、プロジェクトの数も増え続けていました。そこで2019年4月、より社会課題という領域について注力していくため、分社化が決まりました。事業の責任者だった私が、そのタイミングで社長に就任しました。

— CFのサポートとは、具体的にどのようなことをしているのですか。

酒向: まず、CFの意義は、社会課題の解決を後押しすることです。そして、我々の事業は、CFを広く募るためのプラットフォームとして機能すること

です。プラットフォームには、中立的な箱として存在することに意味があるともいわれます。しかし、GoodMorningは社会課題の解決を目的としているため、「私たちにとっていい社会とは何か」を定義しています。たとえば、掲載における審査も、利用契約以外にも「バイアスの再生産をしない」「差別を助長しない」「第三者を傷つけるリスクがない」といった基準を設けています。

新型コロナウイルスによるクラウドファンディングの変化

— 新型コロナウイルスの発生を受けCFへの注目が高まっています。御社ではどのような取り組みをしているのですか。

酒向: 2020年2月末よりCAMPFIREグループ全体で、新型コロナウイルスによる被害を受けた方を対象としたサポートプログラムを実施しています。目的は、休業要請や移動自粛により資金繰りに苦心する事業者にCFで資金を調達し、事業を継続できるようにすることです。具体的には、「CFの掲載のサービス手数料を0%(通常9%)に、決済手数料のみいただく」サポートプログラムを実施しています。2020年4月現在、プロジェクト掲載

数は約2000件です。支援額に関しては、前年の同月比のほぼ4倍となっています。

社会課題への興味 ICUで学んだこと

— 大学時代にも、社会課題の解決に取り組まれたのですか。

酒向: 大学時代には、人類学の授業で、2週間のフィールドワークで沖縄の伊江島を訪れました。フィールドワークの授業は、隔年開講で人類学の教授が持ち回りで実施している授業なのですが、私は森本美恵先生が担当なさったときに受講しました。

一番記憶に残っているのは、調査者として基地の話を知ると「基地を東京に持って帰れ」とどなられることが何回もあったことです。たとえば、課題を解決したいと思っても、それはエゴであり押し付けである。調査者としてフィールドに入ることの暴力性とかはあるということを当時感じました。

— 伊江島の住民に対し「無自覚な暴力性」がはたらいてしまった壁に対し、どのような対話をなさったのですか。

酒向: なぜ訪れたのか、自分がどのような経緯で調査をしたいのかをきちんと説明をするように心がけました。直接基地の話聞くだけではなく、とにかく毎日会いに行き、邪魔にならない

程度に伊江島でのお話を聴くようにしていました。ときには、地域ならではの言葉を理解できないこともあり、若い方に通訳をしてもらい、年配の方々の話を聞くこともありました。

— そのときの経験を、その後どのように生かしているのですか。

酒向: 自分が中立的に見える立場だからこ働いてしまうことがあるような暴力に対して自覚的でなければいけないと考えており、チーム内でもよく話し合うようにしています。

今後への意気込み

GoodMorningを通じて、「社会に対して、みんながあきらめなくていい状況」を作っていきたいです。CFを通して課題を解決した人、また携わっている方々の人数や規模を可視化することにより、わたしたち一人ひとりが社会の構成員で、社会を作っているのはわたしたち市民一人ひとりなのだと伝えることを伝えたいです。

酒向萌実

(SAKO, Momi / 60 ID16)

2016年卒業。MCC(メディア・コミュニケーション・文化)専攻。同年4月に当時、上場したばかりのアパレル企業に就職。退職後、2017年1月よりクラウドファンディングにおけるプラットフォーム企業CAMPFIREに転職。同社内の社会課題に特化したCFプラットフォーム、GoodMorningの事業に携わる。2019年4月に同事業が分社化すると、代表取締役に就任。

腰痛・頭痛・自律神経失調症を改善したいあなたへ

ICU卒業生の佃隆(44期ID00)とパートナーの佃美香が27年間運営しており、毎年1万人以上の方が来院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院には、ICU関係者の方が来院者の4割を占めています。当院では、関節の動きが鈍く神経の流れが悪くなっている箇所とあなたの症状との関連性を分析し、症状の原因を特定します。独自のつくだ式カイロプラクティックケアによる治療、「姿勢の魔法」シャキーン!メソッドによる知識、分子整合栄養医学による栄養の3本柱によって、症状改善だけでなく、姿勢矯正、ひいてはあなたの理想の暮らしを送る健康サポートをします。ICUとご縁のあるあなたのお役に立てましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

ICUアラムニュースを見て...とお電話ください。〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平瀬ビル301号室

tel **0800-888-4270** 受付時間 ▶ 8:30~20:00

web <http://mitaka-chiro.com>



当院長佃隆は

■1日3回で、ねこ背がよくなる「姿勢の魔法」シャキーン!
■姿勢をよくすると、人生がきらめく!
の2冊を出版しております。



DAY賞受賞者エッセイ

2020年のDAY賞を受賞した5人のエッセイをお届けします。

翻訳：鈴木律（本誌） 写真：本人提供、小泉氏のみクレジット記載



茅野友子氏 (2 G1972)
CHINO, Tomoko (CLA 2, G1972)

ICUで受けた教育を海外在住中に活かし、50歳を過ぎて博士号を取得。教授として本格的に教育と英文学研究のキャリアをスタートさせた。ICUと第2の母校UCI（カリフォルニア大学アーバイン校）との交流に協力し、1997年にUCI学長賞を受賞。ペディラヴィウム会の設立と運営に40年近く携わり、またピースベルスカラシップの一つとしてD.S.ブルワー博士記念奨学金を設立。昨年11月に『シェイクスピアの時と我々の時』を上梓。

Chino put to work the education acquired at ICU in her expatriate life, obtained her doctorate in her fifties and began in earnest to teach and research about English literature. As ICU professor, she facilitated exchanges with her second alma mater, University of California, Irvine, and received the University's Chancellor award in 1997. She has been involved in the establishment and running of the Pedilavium Society for more than 40 years and has also set up the Peace Bell Scholarship in memory of professor D.S. Brewer. She also published "Shakespeare's Time, Our Time" in November 2019.

私がICUという大学の存在を知ったのは1952年、高校2年生の時でした。ある朝、新聞を読んでいた父が急に大きな声で「友子、お前の行く学校が見つかったよ！」と見せてくれたのが、「国際基督教大学という名前の新しい大学が1953年に開学する」との記事でした。その瞬間から今日までの68年間、ICUは自分の人生と切っても切れない存在となりました。今また、同窓会からDAY賞を頂くことで、ICUがどのように私を導いてくれたかを顧みるよい機会を与えられました。心より感謝申し上げます。

なぜICUが自分の行く大学だと直感的に

思い込んだのか、不思議なようですが、私にはほかの選択肢は考えられませんでした。それは、この大学のネーミングが全てを語っていると信じたからです。国際性とキリスト教と学問の三つを具現した理想の学校で勉強する以外に自分の未来はないとの確信の裏には、子供ながら戦争中の学童疎開や、九死に一生を得た東京大空襲の悪夢の経験、戦勝国の言語と思考を知りたいとの思いがありました。

幸い入学を許され、まず英語と一般教養科目から始まったICUの4年間は、当時ある教授がいわれた“your formative years”、まさに私の自己形成期でした。そこで出会った忘れ難い先生方のなかで特に人文科学科長の神田盾夫教授の存在は大きく、転科して英文学を専攻したいと申し出て「それでは貴女によい先生を連れてきてあげよう」といわれました。そのお言葉どおり、3年生の秋、待望の教授がイギリスからICUに赴任され、私のアドバイザーになって下さったのです。それがチャーサー研究で第一人者のデルク・ブルワー先生で、ICUには2年しかおられませんでした。ご帰国後ケンブリッジ大学イマニエル・コレッジ長の任に就かれてからも逝去されるまでご指導を受け、また来英のICU生たちのために尽くして下さいました。

スイスから来られたエミール・ブルンナー先生には“challenge and response”という言葉も教えて頂きましたが、先生ご自身がこの言葉の具現そのものの生き方を我々に示して下さいました。ICU教会で受洗したのも、その時は分かりませんでした。その後の自分の生きる道しるべとなり、今に至っています。

同窓生と結婚して1966年から海外生活が始まりましたが、その国々がかつての敵国であったこと、また初めての外国がオランダであり、フレミッシュ絵画の本場でもあったので、あらためて歴史や美術面でICUで学んだことが試される貴重な経験をしました。

このように、ICUで多くの方々の無償の善意に包まれた教育を受けた私にできることは、教育の場で社会で教会で何らかのプラスの活動をする、研究を続けること以外にありません。最新の研究成果として、2019年11月に『シェイクスピアの時と我々の時』と題する著書を上梓しました。またICUの学制改革で人文科学科なき今、ペディラヴィウム会（一般社団法人）を研究と交流の場として守り育てていきたいと願っています。

ICU jumped into my life in 1952, when I was in second year at high school. One morning, my father who had been reading the newspaper suddenly shouted “I've found the school that Tomoko you should go to,” and showed me the article – a new school called International Christian University will accept students from 1953. Eversince that moment for the past 68 years, ICU has been and is part and parcel of my life. Here again, the DAY award sponsored by the Alumni Association has given me an opportunity to reflect on how ICU has been my guiding light. Let me express my heartfelt gratitude.

Why did I get into my head that ICU is the school I should go to? It might sound strange, but there was no other choice. The name of the university says it all, I believe. I was convinced that my future would only be realized by studying at an ideal school, embodied in its international nature, Christianity and scholarship. Behind that conviction was the experience of evacuating to the countryside during World War II, then on my return to Tokyo narrowly escaping the nightmarish great air raid of March 1945 and my wish to learn the language and thought patterns of the Allies.

Having been admitted to ICU fortunately, one professor described the four years at ICU as the period of formation, starting with the English language and liberal arts programs. During those formative years, amongst

the unforgettable tutors that I met, the weight of Professor Tateo Kanda, head of the Humanities Department, was enormous. On consulting him about changing my major to English Literature, he replied, “I'll invite just the right teacher for you.” As promised, in the autumn of my junior year, a professor arrived at ICU from Britain and became my advisor. He was Derek Stanley Brewer, the foremost authority on Geoffrey Chaucer, who remained at ICU for two years and on his return became master of Emmanuel College, Cambridge. He took care of the ICU students in Britain and continued to academically advise me until he passed away.

From the Swiss theologian Emil Brunner, I learned the motto, “challenge and response.” Professor Brunner was the embodiment of those words and showed us how to live by them. Although I may not have understood it at that time, that phrase may have been the trigger to my baptism at the ICU Chapel and was the guidepost on how I should live. It continues to this day.

Having married an alumnus, we started our lives together overseas in 1966. The countries we lived in were former wartime enemies and our first posting was to the Netherlands, the home of Flemish school of painting, where what I had learnt at ICU on history and arts were tested, an invaluable experience.

Having been educated and surrounded by unconditional love and benevolence of the many teachers at ICU, my purpose now is to continue my research and also do something positive, be it in academia, in society and at church. As a fruit of my recent research, I wrote and published “Shakespeare's Time, Our Time” in November 2019. As the department of humanities no longer exists due to the ICU curriculum reform, I would like to further expand nurture the Pedilavium Society, a non-profit organization, as a venue for research and networking.



村上陽一郎先生 (1972-2008在職)
MURAKAMI, Yoichiro P. (tenure 1972-2008)

科学史・科学哲学の分野では日本を代表する研究者で発信者。ICUでは1972年から非常勤講師として、1995年から2008年の退任までは教授として教壇に立ち、その聲に触れた同窓生は数多い。2016-17年の第一回・第二回同窓会リベラルアーツ公開講座に登壇、同窓生を超えて学外からも幅広い聴衆を集め、ICUのリベラルアーツへの理解を広めることに貢献した。

初めに、本学の卒業生でもない人間をDAYにお選び下さったこと、まことに光栄で、感謝のほかはありません。

私のICUとの関りは、理学科のカリキュラムの一つ、科学哲学を担当する非常勤講師として勤め始めたことでスタートしました。そのキャリアが長かったので、1995年に、前任の渡辺正雄教授のご退任とともに、東京大学での定年を一年残して着任したとき、ICUはすでに私の中では、母校のやうにさへ感じられておりました。

そのときのことを記しておくのも、何分

In the field of history and philosophy of science, Murakami is a renowned researcher and messenger. He has taught at ICU since 1972 and served as professor from 1995 to his retirement in 2008. Many alumni have had the honor of listening to his lectures. Two years running in 2015 and 2016, Murakami spoke at the first and second Alumni Association Liberal Arts Open Lecture, attracting audience from the alumni and outside and contributing to the broader appreciation of ICU's Liberal Arts.

今まで語ったことがない話ですので、何かの意味があるかもしれませんが。東京大学で最後となった職場は、大学院横断的な先端科学技術研究センターといふ組織で、そのセンター長をしてをりました。センター長の任期が終れば、定年まであと一年は、そのままセンターに居残ることもできましたし、古巣の教養学部へ戻る選択肢もありました。しかし、どちらも、ポストの極めて窮屈な国立大学で、人事面で少なからず迷惑をかけることになる。さて、と思索してゐるころに、ICUから有難いお誘ひがありました。三鷹に住んでゐる私にとって職住接近、また非常勤で永らくお世話になってきたこともあって、心は傾いておりましたが、他にもお誘ひ下さるところがないわけでもないことも手伝って、最終的決断に至ってはあなかった、といふのが正直なところでした。

秋の好日、思ひがけない訪問客が、先端研（前述センター）のセンター長室にあ

りました。京都に設立された日文研（国際日本文化研究センター）の梅原猛センター長でした。梅原さんは、日文研に熱心に誘って下さいました。心が動きました。ユニークな研究所として、教育義務もなく、研究環境としては、大変魅力があったからです。しかし。

この梅原さんのお誘ひが、反対にICUからのお誘ひをお受けする重要な契機となったのですから、我ながら人生の不思議さを感じます。ある意味では、ICUに申し訳ない言ひ方になりますが、率直に言へば、同居する母が九十歳を超えてゐたからです。その母を連れて、京都に新しく生活を始める勇気が出なかったのです。ICUは、歩いても自宅から三十分、車を使えば二十分で通へます。この対比は決定的でした。その後、母は百六歳まで生きることになるのですが、もし京都へ移住してゐたら、寿命はもっと短かったに違ひありません。次に来た契機は、やはり、過去からの親しさの濃

度でした。新しい未来を拓くことへの私の臆病さが、日文研の魅力を上回ったと言ってもよいかも知れません。

ICUに着任して、初めての出校日、私は大きな衝撃を受けました。人文科の同僚の方々と話をしていると、何気なく「研究・教育」といふ表現を使ったのです。前任の職場では極当たり前の表現でした。耳敏く聞き咎めたある教授の方が、「先生、ここでは順番が違ひます」と注意して下さいました。最初何を咎められてゐるのか、判らなかつたのですが、さう言へば、戴いた研究室のある建物の名前が「教育研究棟」であることに気付いて、ご注意の意味が腑に落ちました。さうなのだ、と肝に銘じました。

信仰遍歴に触れて置ませうか。小学生の頃、内村鑑三の最後の直弟子の御一人が、先生の中にをられて、その日曜学校に中学生まで通ひました。内村の『四福音書の研究』などは今でも座右にあります。高校生になって暫く、遠去つた後、あることに導かれて、公教要理の集りに通ひ、1958年クリスマスに、南山教会で受洗しました。ICUで、宗論的な摩擦を全く感じなかつたのは、エキュメニズムの時代とはいへ、このコミュニティの皆様のお蔭か、その点も有難く思つてをります。

結局21世紀COEプログラムの代表といふこともあって、大学院教授としての定年を更に一年延長し、七一歳まで、都合十三年に亘つてお世話になってしまいました。先任の渡辺正雄教授の粘り強いご努力もあって、科学史・科学哲学の講義枠は、退職

までは守り通しましたが、その後の展開のなかで、研究所も講義枠も消滅したやうで、その点だけが、力不足の心残りとなってをります。

重ねて、同窓会の今回のご厚情に、篤く御礼申し上げます。

It is truly an honor to be chosen as one of the Distinguished Alumni this year, despite the fact that I am not an ICU graduate and am truly grateful.

My path first crossed with that of ICU when I began teaching part-time the philosophy of science, a subject in the Natural Sciences curriculum. Because of my long association, on the retirement of my predecessor, professor Masao Watanabe in 1995, I had already thought of ICU rather like an alma mater.

As this is the first time to divulge the story, perhaps it is meaningful in writing down what actually happened. My last post at Tokyo University was the directorship of the Research Center for Advanced Science and Technology, an interdisciplinary graduate organization. When the tenure ended, I would have one year left to my retirement from Tokyo University; I could have remained at the research center or returned to my former College of Arts and Sciences. But rigidly ruled by the national university regulations, transfer to either post would have vexed the personnel department. While I was ruminating on what to do, I received a welcome invitation from ICU. This offer was doubly attractive because of my affinity to ICU, having taught for quite a while, and proximity,

living in Mitaka meant my workplace would be extremely close by. But with other institutions also sounding me out, I was still holding off my final decision. That is the truth.

One fine autumn day, an unexpected visitor entered my office at the research center of Tokyo University. It was Takeshi Umehara, director general of the Nichibunken, or the International Research Center for Japanese Studies established in Kyoto. Umehara, the philosopher, eagerly enticed me to come to Kyoto. I wavered; it was a unique institute with no teaching obligation and an extremely attractive research environment.

However, life is wondrous in that it was professor Umehara's offer that prompted me to accept the tenure at ICU. I do apologize for saying this, but honestly speaking it was more to do with my nonagenarian mother, who was living in the same house. I just did not have the courage to transfer to Kyoto and start a completely new life. ICU is either a 30 minute walk or a 20 minute drive. This difference was decisive. My mother lived to the ripe old age of 106, but if we had moved to Kyoto, her life span might have been shorter. The other additional point was my strong affinity to ICU from the past. It could be said that my cowardly attitude against trailblazing a new future outweighed Nichibunken's charm.

On my first day as a full-time professor at ICU, a comment came as a shocking revelation. In my conversation with the Humanities Department colleagues, I used the expression "research and education" without thinking too deeply. That was the normal

phrase used in my previous organization. A keen-eared professor cautioned me, "the order is different here." For a moment, I did not quite understand the reproach, but I realized that my office is located in the Education and Research Building. Every thing fell into place and the new precedence was engraved in my mind.

Let me touch on my religious pilgrimage. One of the last pupils of the Christian evangelist Kanzo Uchimura was a teacher at my primary school and I attended his Sunday school until my middle school days. Uchimura's "Research of the Four Evangelists" is still kept in my bookshelf. Having distanced myself from church during my high school years, an event lead me to catechism gatherings and in Christmas 1958, I was baptised at the Nanzan Catholic Church in Nagoya. At ICU, I have not felt any religious or doctrinal friction, thanks to Ecumenism, but more due to the tolerant nature of this community. I am very thankful.

Eventually, as head of the 21st Century Center of Excellence Program, my retirement from graduate school was lengthened by a year, and I served for 13 years until the age of 71 as ICU professor. Due to the tenacity and dogged efforts of my predecessor, Masao Watanabe, I lectured on the history and philosophy of science until my retirement. However, in the denouement that followed, the research institute and the courses were both discontinued. This was my failing and the only regret that I have.

At the end, let me repeat my profound gratitude to the Alumni Association.



齋藤顯一氏 (17)
SAITO, Kenichi (CLA 17)

第15代同窓会長として2002年から2006年まで同窓会を率いた。斬新なアイデアと若手現役世代や在校生を巻き込む求心力で、現在の「働く同窓会」の礎を作った功労者。同窓会長退任後は、各方面で活躍する同窓生をインタビュー記事の形で紹介する「今を輝く同窓生たち」(同窓会Webサイトに掲載)を開始し、2020年で15年目を迎える。これまでに67人の同窓生を紹介し同窓生への励ましとICUの知名度アップに貢献している。

Saito served as the 15th president of the Alumni Association from 2002 to 2006, was the moving spirit in involving the younger generation alumni and students with his innovative ideas and is credited with laying down the foundation for the present alumni association that works. Even after stepping down, he has continued to interview alumni who have distinguished themselves in various fields for 15 years. Please refer to "Today's Shining Alumni Star" in the Alumni Association homepage. Sixty seven alumni have made their appearance, encouraging other alumni and enhancing ICU's visibility.

この度はDAY賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。まさか、自分が同窓会長の時に設立した賞に選ばれるとは思わず、「自作自演」になってしまうのではないかと受賞をためらつたのが本音なのですが、2006年から現在まで15年間もこの活動を続けてきてくださった同窓生や

事務局の皆様感謝申し上げるとともに、ICUの知名度・魅力度を高めることに貢献なさつた皆様に肩を並べることができたことをとても光栄に思います。

私は現在、問題解決者の育成を通じて企業の業績を高めることに取り組んでいます。問題解決とは学問ではなく、記憶した知識で与えられた問題を解くわけでもありません。本当の問題解決とは、考え方であり、頭の使い方であると私は思います。事実データを集めて分析し、本質的な問題を発見し、その意味合いを正しく論理的に理解する。そして成果を実現させるために、人を巻き込みながら行動に移す。問題解決は、組織、団体、企業、ひいては社会をより良くするための考え方です。大きな問題だけでなく、常日頃からこの問題解決的な思考で生活することで、より良い人生が送れる、すなわち問題解決を学ぶということは、生き方を学ぶということでもあります。

私が2002年に同窓会長を引き受けたときも、同窓会を「同窓生、在校生、大学にとって魅力的な集まりにしてみたい」という願いをもって、問題解決的な考え方をともに様々な取り組みを考え、副会長をはじめとする理事・評議員の方々、そして事務局、同窓生、学生の皆様のご協力のもと、評議員や在校生を含めた部会活動の活発化、アラムナイニュースの刷新、学生評議員制度やドリームコンペティションの導入、募金パーティー、DAYなどを実施しました。このような取り組みは、時代が変わるにつれ、そのとき必要とされている最適な形へと変化させていく必要があります。これからも、ICU同窓会がICU、そして同窓生のためになる活動を実現できる場であり続けることを心より願っております。

“問題解決”とは、言葉にすると簡単に聞こえますが、今の日本の状況をみると、問題解決的な思考で物ごとを考えられる人は非常に少ないと感じます。1990年のバブルの崩壊は1300兆円にも上る資産を失うことにつながり、日本の国際競争力は低下したまま回復できていないのが現状です。正しく考える力をもつ人材は、これから先どんどん必要になってきます。問題解決ができる人材が増えることで、より良い組織、より良い社会、そしてより良い日本ができると信じ、これからも問題解決者の育成に邁進していきたいと思つています。

I am truly thankful for being selected as one of the Distinguished Alumni of the Year. As the DAY was inaugurated when I served as Alumni Association president, I was hesitant at first about accepting this prize – would I not become a director-actor in a charade! But on second thoughts, it would be an honor to line up shoulder to shoulder with those who have raised ICU's visibility and appeal, and to thank the alumni and secretariat that have continued these activities for the past 15 years since 2006.

Currently, I am educating and training problem solvers in order to improve corporate performance. Problem Solving is not an academic discipline, nor does it not rely on rote memory to solve issues. I believe that true problem-solving is a way of thinking and utilizing one's mind. One has to gather the facts and data, uncover the essence, correctly and logically understand the meaning, get people involved, take action and obtain results. Problem-solving makes for bet-

ter institutions, organizations, corporations and ultimately society. Not only major issues, but by tackling one's daily chores with a problem-solving approach, life itself would be better. That is to say, learning about problem solving means learning to live.

On assuming the post of president, I utilized the problem solving thought process to create various programs to make the Alumni Association a more vibrant place to gather for the alumni, students and the university as a whole. With the help of the vice presidents, trustees, councillors, secretariat, alumni, students, the committee activities were livened up, the Alumni News renovated and redesigned, the student councillor scheme and Dream Competition introduced, fund-raising parties and the DAY prize organized. These programs should change optimally according to the times. It is my strong wish that the Alumni Association continue to be a venue where activities can be carried out for the benefit of ICU and alumni.

The term "problem solving" may sound easy enough, but if I look at the current situation in Japan, there is a dearth of people who can think through based on this problem solving approach. When Japan's bubble burst back in 1990, 1300 trillion yen worth of assets went up in smoke and this country's competitiveness has never recovered. The need for people who have the ability to think properly will become even greater. With more people endowed with problem solving skills, a better organization, a better society and a better country would be built. I will press forward in the education and training of problem solvers.



Photographs provided by the PinchukArtCentre © 2012. Photographed by Sergey Illin.

小泉明郎氏 (43 ID99) KOIZUMI, Meiro (CLA 43, ID 99)

ICU卒業後、英国の美大で映像を学び、アムステルダムでアート活動を展開する映像作家。2007年からは横浜を拠点に国家や共同体と個人、身体と精神の関係について探求。2009年森美術館(東京)での個展、2013年ニューヨーク近代美術館(MOMA)での個展をはじめ、世界各地の美術館で個展を行うほか、国際的な芸術祭などで作品を発表し続けている。また昨年の「あいちトリエンナーレ2019」「表現の不自由展」にも出展。作品は東京都現代美術館(東京)、テイトギャラリー(イギリス)、ニューヨーク近代美術館(米国)をはじめ国内外の多くの美術館に収蔵されている。

Video artist Koizumi studied at an art and design college in Britain, after graduating from ICU and for a while worked in Amsterdam. From 2007, Koizumi has chosen Yokohama as his residence and pursues the relationship between nation-state, community versus individuals, the body versus the spirit. Recent solo exhibitions include the Mori Art Museum, Tokyo, in 2009, the Museum of Modern Art, New York, in 2013 and many museums around the world. He has also participated in various group shows, such as the Aichi Triennale in 2019 and the "After 'Freedom of Expression?'" His works are exhibited at the Museum of Contemporary Art, Tokyo, the Tate Gallery, London, Museum of Modern Art, New York and many others.

「人間とは何者か?」「その人間が作る社会とは?」「神の存在とは?」「真理とは?」「人は何のために生きているのか?」こんな途方もない大きな問いが、ICUでの4年間に私の心の奥底に蒔かれました。瞳を輝かせながら、発掘されたばかりの土器の破片を手にも、数千年前の人間の営みへと思いを馳せるウィルソン先生。宗教、信仰、神といった理性を超えたものを徹底的に知性によって捉えようとする森本先生。芸術と文学に通底する人間の豊かな精神活動の世界に私を誘ってくれたヒューズ先生。他人の存在自体を受け入れ尊重し、分かり合えない他者と共生していく喜びを養ってくれた4年間の寮生活。そしてこの社会では自由すぎる私の生き方に理解を示し、支え続けてくれている妻との出会い。今の私の人生と芸術活動のベースが形成された貴重な時間でした。

卒業した1999年は、バブル崩壊後の就職氷河期真っ只中。銀行に就職した優秀な先輩たちがどんどん銀行を辞めていくような時代でした。そんな時代だからこそ型にはまった生き方ではなく、自分のやりたいことを追求するべきだ、という自由な空気があったと記憶しています。しかし、芸術家になるというプランはちょっと無謀すぎたようです。随分周りの人々に心配と迷惑をかけました。また随分助けられてきました。おかげさまで、どうかこの20年間、自分を見失わず、ICUで蒔かれた問いに水を与え続けられてきたと感じています。現在は、国内外の美術館、美術展、ギャラリーなどで、主に映像を使った美術作品を発表しています。

私の作品は、決して心地の良い、綺麗な絵画などではありません。また一様的美を押し付けたり、ましてや「美しい国家」を

表象するようなものでもありません。私の作品は、人間の疑問と混乱と迷いに満ちたものです。個人の善意や美しさと共に、汚さや攻撃性、そして集団心理が生み出す暴力や無責任さを描き切ろうという試みです。時に常識を疑い、社会への批判を投げかけ、権力と権威をあざ笑い、タブーにも触れ、人々が見たくないような現実をも付度なく空気を読まずに描き切ろうという試みです。そうすることで、敵一味方や、国家、民族などといった枠組みを超えた、個人と個人が対峙できる小さな場所を、この混乱した世界に作る事が出来るのではと信じ活動してきました。

しかし近年、この国では社会批判を含んだ作品を発表することが困難な時代になってきています。昨年起こったあいちトリエンナーレ2019をめぐる検閲問題は、政府をも巻き込んだ形でこの状況に拍車をかけました。「表現の自由」とは決して芸術家が好き勝手表現する権利の話ではなく、「言論の自由」、「報道の自由」、そして私たちの「知る権利」と繋がる民主主義国家の根本であり、社会の多様性を担保するためにも、また人類が平和に共生する上でも絶対不可欠な自由です。この萎縮した状況をなんとか改善するために、昨年来、仲間のアーティスト及び関係者と抗議/啓発活動を積極的に続けています。その活動中に、様々なフィールドで活動している方々との新たな繋がりが生まれているのですが、どのような場に行っても「私もICUのOBです」と声をかけてくださる方が多いことに本当に驚かされています。ICUで蒔かれた種が、時と場を隔てて、新たな連帯のネットワークとしてこの社会に根付いていることを実感させられる瞬間です。

まだキャリアも志も半ばの私が、このような立派な賞をいただいてよいものか正直迷いました。しかし、私のような生き方もあるという一例を知ってもらうということ、そして、この窮屈で混乱している時代に悩み、葛藤し、戦っているOBの方々や現役生に、わずかでも励みや望みになってくれればと願ってこの名誉あるDAY賞を頂くことにしました。まだまだやらねばならないことが山積みですが、これからもICUで蒔かれた問いに真剣に向き合いながら、観る人の心を動かせるような作品を作り続けていこうと思っていますので、どうぞご期待ください。

この度は本当にありがとうございます。

“What is a human being?”

“What sort of society do humans build?”

“Does God exist?”

“What is truth?”

“What do humans live for?”

These profound questions arose in my head in my senior year at ICU. Holding broken fragments of earthenware, just excavated from a dig site, professor Richard Wilson taught me to imagine the lives of people several millennia ago. Professor Anri Morimoto made me thoroughly and intellectually understand about religion, faith, God and other elements beyond human rationality. Professor Clair Hughes invited me into the rich universe of spiritual activities that underly both the arts and literature. Four years in the dormitory taught me to accept and respect others and to enjoy co-existing with those one could not truly comprehend. I also met my wife who has



Photo by Yuki Moriya, courtesy of Kyoto Experiment

In the State of Amnesia, 2015. Installation view at Kyoto Art Center for Kyoto Experiment: Kyoto International Performing Arts Festival 2016 Autumn.

supported me through thick and thin, making allowance for my *modus vivendi* that is far freer than what society requires. The time spent at ICU was invaluable in shaping the foundation of my life and artistic activities.

When I graduated in 1999, Japan's economic bubble had burst and it was an ice age for job seekers. Academically capable friends who had joined big banks were now leaving one after the other. I remember that there was an air of freedom – I could do whatever I wanted to do and not be tied to conventions. However, my plan to become an artist was a little reckless. Many worried for me. I may have annoyed people around me, but was also helped by them. Thanks to everyone, I have been able to water the seeds sowed at ICU for the past 20 years, without losing sight of myself. Currently, I am creating mainly visual art work for museums, galleries and exhibitions both in Japan and overseas.

My works are not pretty paintings, nor pleasant to look at. Neither do I impose a uniform style of beauty nor try to symbolize a “beautiful country.” My works are filled with human doubt, chaos and hesitation, attempt to draw out the benevolence and beauty of people, and also the ugliness and aggression, the violence and irresponsibility born out of herd mentality. At times, I would call into question common sense, criticize society, make a mockery of power and authority, touch on taboos, draw up without any hesitation nor conjecture reality that people may not wish to look squarely at. Through these activities, I believe small spaces where individuals can square off each other, smashing the boundaries of friend or foe, nation-state and race in this chaos.

However, it has become more dif-

ficult recently to openly display works that portray social critique in this country. Last year, censorship of the Aichi Triennale exhibition further escalated the situation, with various government officials entering the foray. Freedom of expression is not a debate about artist's rights to do anything and everything, but is fundamental to a democracy where freedom of speech, freedom of the press and our right to know are assured, and is also indispensable to guarantee social diversity and peaceful co-existence of humankind. To break through this atrophied state, I have got together with other artists, friends and interested parties to protest and carry out enlightenment campaigns from last year. Through such activities, new connections have been created with people from various fields. And I'm truly surprised to find so many alumni who would walk up to me and tell me that they had been at ICU. It is at those moments I sense that the seeds sown at ICU have taken root in this society's soil as a new solidarity network, transcending time and space.

Still midway in both my career and achieving my ambition, I wrestled with the question of whether I should decline such an outstanding prize. But, ultimately I decided to accept the honorable DAY award to let the world know that there are people like myself and also offer some encouragement and hope to alumni and students who are agonizing, fighting and being torn apart in this cramped and chaotic world. There is just so much to do. In the future too, I would like to seriously confront the questions that were planted in me at ICU and create works that strike a cord in the onlooker's hearts. Please look forward to my future exhibitions. Let me reiterate my thanks.

Wedding at ICU
2人が出会ったこの場所で

ICU 教会での結婚式のご予約・ご相談は株式会社 ICU サービスまで!

株式会社 ICU サービス
国際基督教大学 本部棟 2 階
TEL: 0422-33-3530 MAIL: info@icu-service.com



山本和奈氏 (63 ID19)
YAMAMOTO, Kazuna (CLA 63, ID 19)

在学中、2018年12月15日号・雑誌『週刊SPA』に掲載された女性蔑視の記事に対し、自ら立ち上がり署名活動を展開した。直接編集部を訪れ抗議を申し入れ、謝罪を勝ち取った勇気ある行動は、それまで違和感を持ちながらも声に出せなかった多くの人々を勇気づけた。「おかしいと思うことには自ら声を上げる」という信念を通し一般社団法人Voice Up Japanを立ち上げる。ICU卒業後も人権・ジェンダー問題に取り組んでおり、現在はペルーで活動するNGO Educate For の代表を務めながら、チリにてブロックチェーンに関わる会社を立ち上げている。

In December 2018, a Japanese magazine Weekly SPA published an article extremely disparaging about female university students. Yamamoto, still at ICU, started a campaign to collect signatures, complained directly to the magazine's editors and secured an apology. Her bravery encouraged many who were feeling uncomfortable, yet were unable to voice their fear or pain. Through the conviction that one should raise one's voice if something odd is observed, a not for profit organization, Voice Up Japan, was established. After graduating from ICU, she has continued her work on human rights and gender issues. Currently, Yamamoto heads the NGO Educate For in Peru and is also incorporating a block chain company in Chile.

「私だったら絶対にICUで勉強したいな」と母に言われた言葉をきっかけに、ICUへの進学を決意したのが、私の4年間の始まりでした。広いキャンパス、少人数制の授業、何より多様なバックグラウンドを持つ色々な人が集まるICUで学びたいと思い、その選択は卒業してからも間違っていなかったな、と思います。一番私が影響されたのは、留学をしたこと、留学をして帰って来た最後の1年間でした。スペイン語授業のキンテロ先生に「チリに行ったら？」と言われ、「まさか」と言っていた自分が、まさか本当に日本から一番離れた留学先を選ぶとは、自分自身も親も、思っていなかったことでした。スペイン語の能力が足りなくても、「とにかく行って来なさい。なんとかなるから」と背中を大幅に押してくださった先生には感謝してもきれません。チリに留学をして、初めて自分

のComfort Zoneから出た1年間。スペイン語がわからなく落としたマクロ経済学の授業も、今はいい挑戦でした。この1年間は、本当に自分自身をチャレンジすることができた実りある年だったと思います。人生においてやりたいことが明確になり、自分がどういった大人になりたいかを考えることができた1年間。その1年間があって、そのあとがあったからこそ今があると思います。留学から帰って来て、とにかく最初は起業で大忙しでした。経営学の知識がない状態からビジネスに関することを全て学びながら、夜な夜な何十件ものメールや企画書を書いては、時間があるときは様々な人に話を聞きに行く生活。卒業論文の定期ミーティングには、毎回アドバイザーである斎藤潤先生に頭を下げながら「また進みませんでした」と何度言ったのか、今でも申し訳なく思います。ただ、そんな中でも自分が立ち上げていたNGOのイベントに足を運んでくださったり、卒業6カ月前にまた新たな活動を開始した自分に「活動応援してるよ、ただ卒論もお願いだからやってね」と支え続けてくださった斎藤先生。こうして、尖った自分の性格や何度も変わった卒論のトピックに対し真剣に取り組む、向き合ってくれた教授がいらしてくださったからこそ、「またICUで学びたいな」と今でも強く思います。

そしてICUの4年間の幕が閉じる瞬間の卒業式での日比谷学長の言葉。

「この場にいることを、当たり前として思っはいけない。ここにいることができるあなたたちには、責任があることを忘れてはいけない」

ICUの卒業生であることに胸を張りながら、現在の社会に存在する様々な問題、搾取、格差、暴行などに立ち向かいながら、誰もが共存できる、誰もが取り残されない社会をつくり上げるために行動したいと思っています。世界は、思うより小さいです。そして様々な所にはICUの先輩がいます。ICUのAlumniであることにより、様々な機会があったり、様々な先輩方に助けられました。自分も、同じように貢献をして、これからのICUの卒業生、在學生に同じように手を差し伸べられたらいいなと思います。

"If I were you, I would definitely go to ICU."

My mother's words were the trigger to advance to ICU and the start of my four years of university. The vast campus, the small class education and most of all the diverse background of the faculty and students attracted me. After graduation, I still firmly believe that my decision was right. What influenced me most was my year abroad and the senior year that followed. When my Spanish language professor Daniel Quintero Garcia asked me if I wanted to go to Chile, my answer was - No way! You must be joking! Neither I, nor my parents imagined that I would choose the most distant country from Japan as a study destination. I only have muchas gracias to professor Quintero, who cajoled me, saying "Just go to Chile. It'll work out, even if your comprehension is not sufficient." My Chilean year was the first time outside of my comfort zone. I did fail the macroeconomics course due to lack of Spanish, but I gave it a good fight. That year in Chile was a challenging and fruitful time. It became clear what I wanted to do with my life and what sort of person I should become. I am here today because of the year abroad and the following senior year. After returning to Japan, I was busy trying to become an entrepreneur - learning everything about business without an inkling of business administration, writing dozens of emails and

proposal documents at night and talking to many people. At every meeting with my advisor, professor Jun Saito, I would have to apologize and confess that I had not added a page to my thesis. Despite this, professor Saito would come to events organized by the NGO that I had set up and encouraged me to go on. Even when I started a new program, six months before graduation, he told me, "I'll be cheering you on, but don't forget your dissertation!" In this way, thanks to a professor who took me seriously, dealt deftly with my edgy personality and kept up with the frequent changes to my thesis topic, I feel strongly that I would study at ICU again, if the chance comes.

Furthermore, I remember the words uttered by President Junko Hibiya at the commencement ceremony - "Do not take for granted that you are here today. For those of you present now, do not forget that you have responsibilities."

Proud of having graduated from ICU, I would like to tackle the problems of exploitation, inequality, violence and attempt to build a society where all can co-exist and no one is left behind. The world is smaller than one thinks and there are alumni everywhere. Because I graduated from ICU, opportunities multiplied and many alumni helped me. I hope I will be able to contribute in a similar way and provide a helping hand in return to future alumni and students.

翻訳・通訳 **ICU同窓生10%割引**
料金表等資料をお送りします。電話、メールでご請求ください。

心のコもった翻訳サービス
過去32年間に、**280名**近くのICU同窓生の皆さまにご利用いただきました。

直近3年間にお手伝いした主な分野

- 法律 33%
- IR・マネジメント 20%
- 環境・エネルギー 17%
- 政治・経済 15%
- 学術論文・講演原稿 10%
- その他 5%

- 品質を最も重視するEXIMは、精度に課題があるとされる「機械翻訳システム」を使用せず、人の力による感性豊かな翻訳を心がけています。
- 試訳(無料)も承ります。

翻訳・通訳・制作(デザイン・印刷)
(株)エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.

President 永島 克彦(14期)
TEL 03-3431-2118 FAX 03-3431-2120
E-mail: tokyo@exim-int.com

横浜 事務所
TEL 045-721-4800 FAX 045-721-5165
E-mail: yokohama@exim-int.com

URL: <http://www.exim-int.com/>
Advisor 比奈地 康晴(14期)

PEACEMIND

私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。

ピースマインドは、「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに掲げ1998年に創業した「はたらくをよくする」ソリューションを提供している企業です。職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の方からのご相談をお受けしています。また、当社のビジョン実現に向けて、国内外のグローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。

ピースマインド株式会社
代表取締役社長・共同創業者
荻原 英人 (ID00)

Working Better Together®

「はたらくをよくする」ために、働く人と職場を支援する様々な専門サービスをご提供しています。

- 社員支援**: カウンセリングや職場・産業医との連携を通じて社員の悩みの解消や生産性の向上を支援
- マネジメント支援**: マネジメントコンサルテーションや研修等を通じて人事・管理職の負担低減とチーム運営を支援
- 組織支援**: 顕在化した職場の課題の解決から、未然防止策、いきいき職場づくりまでをトータルに支援

EAP従業員支援プログラム	研修	ハラスメント対策支援	ウェルネスプログラム
ストレスチェック	クライシス支援	休職・復職者支援	健康経営支援

サービス開始から 21年 | お取引企業 1,000社/年 | 外資系顧客構成比 35%

TEL 03-3541-8660
<https://www.peacemind.co.jp/>



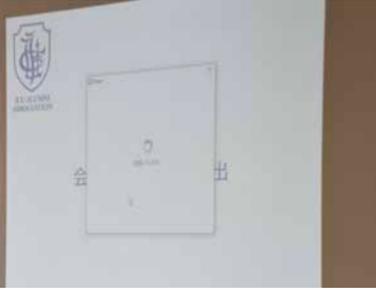
同窓会総会 初のオンライン開催

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、2020年3月28日に開催した
同窓会の総合イベント「桜祭り」は、ICU同窓会年次総会が初めてオンラインで開かれた。

例年行っているイベントのうち、DAY賞^{*}表彰式、
14期生を招待して開かれる予定だった卒業50周年記念式典、大学食堂での懇親会は中止となった。

文・写真：滝沢貴大（本誌）

^{*}) Distinguished Alumni of the Year の略。ICUに在籍したことのある人の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度向上に貢献した人物に対して、功績を称えるために贈呈される賞。今年は元同窓会長の齋藤顯一さんと、一般社団法人Voice Up Japan創設者の山本和奈さんから5人が選ばれた。



Zoomを使用し、 約80人が参加

総会は春学期に大学授業でも用いられたオンラインチャットツール「Zoom」を使用して開かれた。事前に91人の参加申込があり、当日は82人がオンラインで参加した(当日参加者のほか、委任状出状者が65人いた)。総会の冒頭、同窓会長の櫻井淳二さん(28 ID84)は「卒業50周年記念式典とDAY賞表彰式は日程を調整したうえ、可能であれば改めて開きたい。初めてのウェブ会議で不慣れな点もあるだろうが、何とぞよろしく願いたい」とあいさつ。その後、会の進行にあたる議長団が選出され、議案に基づく「議事」と新企画の「報告」の2部構成で進んだ。議事では、昨年度の活動報告と決算報告、今年度の活動予定と予算案が提示され、それぞれ賛成多数で承認された。2020-2021年度の理事・評議員も、同じく賛成多数で選任された。櫻井会長は再任となった。

この日のキャンパスは満開の桜に彩られたが、感染拡大防止のため、キャンパスには同窓会執行部や技術スタッフなど十数名のみが集まった。動画を配信したアラムナイハウス1階の会議室では換気を徹底し、発言者が交代でマイク・カメラの前に立った。出席者の決を採る際には、Zoomに搭載されている「手を挙げる」ボタンを活用した。意見や質問がある出席者は質疑応答の時間に「手を挙げる」ボタンでアピールし、議長の指名を受けて発言した。また、画面共有機能を用いて、議題にあわせて資料を参加者の画面上にも表示した。

会の終了後、櫻井会長は「総会はオンラインよりリアルで開きたかったが、同窓会の規約で4月までに総会を開かないといけないので、やむをえない事情もあった。今後またオンラインでイベントを開く可能性もある。その第1回目としては良い経験になったと思う」と話した。

回線が途切れるトラブルも

会の途中には、トラブルもあった。冒頭、突然ホストを務めた同窓会のパソコンがZoomから切断され、進行が止まってしまった。数分後に復旧したが、櫻井会長は「リハーサルのおかげはトラブルもなかったのに、驚いたし、ひやひやした」と振り返った。トラブルについて、セットアップに携わった事務局の松島真理さん(36 ID92)は「回線は春学期の授業でも使われている大学のものを使っていたので、それが原因とは思えない。推測だが、多くの映像や資料を同時に表示した結果、同窓会のパソコンの方が落ちてしまったのではないかと話す。同じく準備に当たったIT部の安田善一郎さん(31 ID87)も「リハーサルのおかげは参加人数も限られているので、こういうトラブルもなかったが、本番では会場の中継映像と画面共有で表示する資料を画面上で頻りに切り替えつつ、大勢の参加者の映像もZoom上に表示されていた。結果、同窓会のパソコンの負担が大きくなってしまったのでは」と分析した。

議長を務めた福谷尚久さん(29 ID85)は「初めての試みで失敗もあり、ご迷惑をおかけした。参加者全員の顔が見えないことは、参加者からしてもフラストレーションを感じられたでしょうし、議事を進める側としても一体感が感じられない難しさがあった」と話した。とはいえ、無事予定されていた議事はすべて終えることができた。議事後にあった「同窓会の基金運用案」についての報告に対しては、参加者からビデオ通話を介して数多くの意見が寄せられた。また、Zoomでの議事進行の手続き自体についても意見が寄せられた。

自宅からパソコン越しに参加した古川英明さん(62 ID18)は「仕事でもZoomを使うが、ここまで規模の大きい集まりなので仕方ないかなという印象。あれくらいのトラブルは想定内だった」と話す。「総会に参加するのは5回目だが、ここまで議論が盛り上がったのは初めて。オンライン開催で良い意味で周りの目を気にしなくて良かったから、ICUらしい対話型の総会になったのでは」と続けた。福谷さんも「オンライン上で活発な議論が起きるか懸念していたが、いつにもましてご

意見、ご質問をいただけたのは良かった」と話していた。

開催へ至る裏側では

総会以外のイベントの中止や、オンラインでの開催が発表されたのは、3月10日。同窓会のホームページには中止のお知らせとともに、櫻井会長と桜祭り実行委員長の讚井暢子さん(22 ID78)名義で「桜の下で旧交を温め、新しく出会う機会を手放すことは大変心苦しいのですが、苦渋の決断としてご理解いただければ幸いです」とのコメントが掲載された。「来場者には、新型コロナウイルスの重症化率が高いと言われる高齢者も多い。とくに14期の人たちは70歳を超えるし、DAY賞受賞者にも高齢の方がいる。オフラインでは開催できないと判断した」と櫻井会長は話した。

具体的な準備は主にIT部と事務局が請け負った。3月1日、櫻井会長から同窓会理事に対して総会以外を中止し、総会はオンライン開催するという基本方針が通達され、翌2日、事務局からIT部に当日の進行手法について相談。議論の結果、Zoomを使用して開くことを決めた。「IT部員の中には仕事でZoomを使っている人がいたし、大学の授業でもZoomを使うと聞いた。何度かIT部、事務局のメンバーでテストしてみて、大人数の会議で使うのに適したソフトだと感じた。大人数が参加しても動作がスムーズで、音声もクリア。ミュートのオンオフ設定が容易で、参加者の発言を制御しやすい印象も受けた」とIT部の三好正夫さん(9期)は話す。

準備は三好さんを中心に実施。「初めはアラムナイハウス2階のロビーから中継する予定だったが、テストを通して部屋の広さからかエコーが起きて聞き取りづらいことがわかったので、1階の会議室から変えるなど試行錯誤した」と振り返る。他にも、トラブルがあったときにすぐに気づけるよう、モニター用のパソコンと担当者を置く必要に気づき、当日も設置した。

当日に向けては、操作方法をまとめたマニュアルも作成した。三好さんは「今回、自分は初めてZoomを使った。参加者にも当然使ったことがない人もいると思い、パソコンに疎い人でもわかるようなマニュアルづくりを心がけた」。事務局が総会後に集計したアン

ケートによると、約3分の1の参加者がこの日初めてZoomを使用したという。

今後へ

オンライン開催について、事務局の松島さんは「会のファシリテートをどうするかが事前の課題だった。非常事態なので仕方がない面もあるが、言ってしまうとZoomを使えない同窓生を切り捨てる形になってしまった。次回以降は、そうではないファシリテートを考えていかないと話す。因果関係は不明だが、卒業50周年記念式典の参加者を除いても、総会の参加者は例年より約50人少なかったという。

一方、讚井委員長は「オフラインでは参加できない地方や海外の方が参加できる良さもあった」とオンライン開催の成果を述べる。IT部の安田さんも「この数カ月で、オンラインでのやりとりが急激に一般化してきた。今では経験したことがない人の方が少ないくらいの印象を受ける。ひとつのスタンダードができつつあると言え、提供する側としてはやりやすくなるのでは」と主張。櫻井会長は「特に初対面の人と話す場合など、リアルで会わないとわからないこともある」としつつ、「今回、同窓会としてオンラインでのイベント開催のノウハウを蓄積することができた。4月以降、同窓会の理事会は全てオンラインで開いている。ICU祭や来年の総会がどうなるか見通せないが、たとえば秋以降に控えるリベラルアーツ公開講座はオンラインでもできるのではないかと話した。

事態が収束し、オフラインでのイベント開催が緩和された場合でも、オフラインとオンラインのハイブリットで開催するのが良いのではないかと松島さんやIT部の安田さんらは考えているという。松島さんは「今回は全面オンラインでの開催だったので、議長も画面に向かってのみ話せばよかった。しかし、今後ハイブリット開催をしたときには、会場と画面の両方を意識しながら進行する必要は出てくる。そこが次に準備しなければならない点だと考えています」。

来年の桜祭りは2021年3月27日(土)10時半から、ICUのキャンパスで開催予定。卒業50周年記念式典は15期生が招待される予定だ。

New Alumni Association Cabinet

スタートしました! 新しい同窓会体制

2020年4月、ICU同窓会は新体制となり、今期も櫻井淳二会長が率いることとなった。
同窓会活動を盛り上げていく副会長8人を紹介するとともに、櫻井会長に今後の展望を寄せていただいた。

写真: 本人提供、亀山詩乃(本誌)

前期に続き、2期目の同窓会会長を仰せつかりました28期・ID84の櫻井淳二と申します。この度は、新型コロナウイルスの蔓延による困難な時期での新執行部スタートとなりましたが、リベラルアーツで培われた同窓生の知恵を集めて、大学、在校生、そして同窓生の為にできることを考え、皆で力を合わせ乗り切りたいと考えています。何卒皆さまのご協力を宜しくお願い申し上げます。

まず、過去2年間、同窓会の役員・評議員としてご尽力を頂きました皆さまに、心よりお礼申し上げます。過去2年間の同窓会活動につきましては、同窓生の輪を【繋ぐ、繋がる、そして広がる】ことを目指して行ってきましたが、皆さまに積極的にイベントや支部会等にご参加を頂き、お陰様にて同窓生の輪を一層広

く繋げることができたのではないかと感じております。誠にありがとうございました。

また、今回の役員・評議員改選におきましては、役員並びに評議員ともに全体の3分の1の方に新たにご就任して頂きました。これからの2年間につきましては、新しい役員・評議員の皆さまの新しい息吹にも期待し、同窓生の輪を【更に繋ぐ、更に繋がる、そして更に広がる】ことを目指し、その結果として大学、在校生、そして同窓生の皆さまのお役に立つことを目標に、微力ながら務めて参りたいと思っております。

なお、大学におきましても昨年同窓生で初の理事長に竹内弘高さん(13期)がご就任され、本年4月からは2期8年間学長を務められた日比谷潤子前学長のご

後任としてフランス文学の岩切正一郎教授が新学長にご就任されました。同窓会と致しましても、新理事長と新学長にご活躍頂けますようできる限りの協力をして参りたいと考えておりますので、皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

最後に、先日発表されましたTimes Higher Education日本の大学ランキングにおいてICUが昨年に続いて私立大学第1位となりましたことは、同窓会としても大変喜ばしく、大学関係者の皆さまの日頃のご努力に対して心よりお礼申し上げます。また、同窓生の皆さまが大学創設以来、教職員の皆さまと共に築いてこられたICUのリベラルアーツの文化と伝統が評価されたことを誇らしく思うと同時に、同窓生の皆さまのご尽力に対して心より感謝申し上げる次第です。



同窓会会長
櫻井淳二

(SAKURAI, Junji / 28 ID84)

埼玉県比企郡小川町出身。1984年教養学部社会科学科卒業後、邦銀に就職。邦銀では米国、韓国などに駐在し、現在民間教育機関に勤務。同窓会では2014年より4年間総務部担当副会長を務め、2018年より会長に就任。



学生部担当副会長
松本典子

(MATSUMOTO, Noriko / 45 ID01)

同窓会学生部では、現役生の「今」と「明日」を結ぶ役割を担っています。例年は、様々な生き方をしているICU卒業生と現役の学生さんとの交流会「未来予想ZOO」と、就職とその先の人生を考えるための卒業生との交流イベント「キャリア相談会」を実施してきました。現在の状況下でも、卒業生と現役の学生さんを結ぶ場の提供を検討していきたいと考えています。また、新入生の皆さんに向けた、応援メッセージと同窓会紹介に関する動画の作成・公開も行いました。



広報部担当副会長
新村敏雄

(SHINMURA, Toshio / 27 ID83)

広報部のミッションは、「同窓生、大学、在学生間の共通コミュニケーション基盤の構築と、同窓会活動のプロモーション」です。主な活動は以下の通りです。

1. 年2回の「Alumni News」の発行
2. 同窓会 Web サイトや Facebook での情報発信
3. さまざまな分野で活躍する同窓生の姿や同窓会主催のイベント、最新の大学や在学生の様子取材・紹介



財務部担当副会長
岡上啓太

(OKAGAMI, Keita / 52 ID08)

同窓会の予算編成・決算を通じて各部会活動のサポートを行っています。具体的には同窓会収入の源である終身会費の納入率向上対策、適切な支出管理等を担当しています。また、湯浅・細木記念奨学金により学生を金銭面からサポートしており、候補学生との面接による選考や、奨学金基金の管理を行っています。



事業部担当副会長
伊能美和子

(IYOKU, Miwako / 31 ID87)

事業部は、ICU卒業後も、同窓生同士、同窓生と大学/学生の繋がりをもち続けていただくための、グッズ制作、サービス提供、イベント開催などを行っています。

さらに、同窓生が集まれる同窓生のお店の開拓、同窓生が提供する商品・サービスの発掘、それらの紹介など、「モノ」、「コト」を核に、様々な交流を大切に参ります。



総務部担当副会長
讃井 暢子

(SANUI, Nobuko / 22 ID78)

3月の「桜祭り」、今年はCOVID-19の影響で同窓会総会のみをオンライン開催としました。来年は、例年通り総会、DAY表彰式、卒業50周年記念式典、懇親会をフルセット開催して多くの卒業生とお目にかかれることを期待しています。この他、同窓会運営の要である事務局メンバーとともに、同窓会の円滑な組織運営を目指します。



組織部担当副会長
浅場理早子

(ASABA, Risako / 44 ID00)

組織部は、支部化の支援と支部間交流の促進を通じて、世界中に広がる多様な人材宝庫である同窓生との「繋がり」と「絆づくり」のお手伝いをしています。ICU卒業後も、学生時代のネットワークや世代を超えた同窓生のコミュニティプラットフォームとなれるよう、「地域」「業界」「趣味」「研究分野」などあらゆる軸で繋がる支部活動を支援いたします。



大学・募金部担当副会長
長谷川 攝

(HASEGAWA, Setsu / 24 ID80)

ミッションは大学との連携・協力を通じて、ICUコミュニティを盛り上げること。ICU祭に合わせてホームカミングイベントを開催します。大学の募金支援は「新型コロナウイルス緊急支援募金」で始まり、新しい形での支援も探りつつ、次世代へのトーチリレイの軸 Peace Bell 奨学金も引き続き応援します。



IT部担当副会長
鳥居幹太

(TORII, Kanta / 31 ID87)

IT部はICT(情報通信技術)を活用した会員向けサービスの充実と同窓会業務の効率化の推進をミッションとし、Webサイト・会員データベース・事務局や同窓会運営にかかわる技術環境の整備を推進しています。これまでの常識とは違った組織運営が求められる中、技術を活用した新しいつながりに貢献していきたいと考えています。



Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

東京・三鷹市にあるICU。そこから数多くの卒業生たちがさまざまな場所へ旅立っていった。ICUの「I=International」を意識せずとも胸に刻み込んで過ごした大学時代を経て、今、卒業生はどのように生きているのか。この企画では、国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、その地で活動を始めた経緯やその地の魅力を聞いた。そこから見えてくる、“地域にこだわり、地域にとらわれない”生き方とは――？

長崎の地から、サッカーを通じて平和を発信

長崎県 V・ファーレン長崎 代表取締役社長・高田春奈氏 (45 ID01)

文：望月厚志 写真：V・ファーレン長崎提供

今年1月、高田春奈さんはJリーグクラブ「V・ファーレン長崎」の社長に就任した。現在、Jリーグ唯一の女性社長だ。

ソニーを経て起業

ICUでは人文科学科で宗教・倫理・哲学などを学び、2001年ソニーに入社する。ソニーの半導体部門で人事や研修を担当し、人材開発の重要性や面白さに目覚めたという。「ソニーという皆英語ができるイメージがありますが、エンジニアには英語が苦手な方も多く、そんな社員さんたちにいかに英語を学んでもらうかは面白い仕事でした。もともと私自身も英語が好きではなかったのと同じ気持ちで学び、実は英語力が一番成長したのはこの時ではないかなと思います」

2005年、ソニーを辞してジャパネットたかたの人材開発を担当する関連会社「ジャパネットソーシャルキャピタル」を設立、社長に就任した。筆者ははっきりソニーから転職したのだと思って質問したのだが、「ジャパネットに一部資本を出してもらった関係で、ジャパネットの関連会社という位置づけで、起業したのです」と、高田さんは自らが起業したことを強調した。

「高田明の子どもといわれるのが嫌で、父と一緒に働くことはそれまでまったく想定していませんでした。しかし、成長していくジャパネットにおいて、自分の経験が役に立つのではない

かと思ったこと、起業を通して自分自身も成長できるのではないかと思ったことから、会社を作ってサポートするようになったのです」

2010年には、ジャパネットからの独立性を高めるため、新会社エスプリングホールディングスを設立。人材開発の会社と併せ、広告代理店・広報会社の機能を持つ会社も傘下に置き、社長に就任する。

Jリーグクラブの社長に

一方で、ジャパネットたかたは、2015年1月、テレビショッピングのMCとしても有名な高田さんの父の高田明氏が社長を退任。高田さんの弟、高田旭人氏が社長に就任する。その際、旭人氏と相談し、ジャパネットの機能拡大に向けて、高田さんが経営していた広告代理店と人材開発の会社をジャパネットグループの子会社とし、高田さん自身も再度、ジャパネットグループで働くこととなった。

その後2017年に、当時ジャパネットホールディングスがメインスポンサーを務めていたプロサッカークラブ「V・ファーレン長崎」に経営問題が発覚、ジャパネットホールディングスがクラブを100%子会社化し、高田明氏が社長として経営再建に取り組むことになった。2017年のうちに過去の経営の洗い直しをおこなって経営を刷新、チームはJ2で見事2位となり、J1に昇格した。

「V・ファーレン長崎を子会社化したときから、グループ会社としてクラブの広報や広告のサポートをしていました。J1に昇格した2018年からは、V・ファーレン長崎の運営や事業の仕事も執行役員として兼務することに。父がクラブの社長をしていましたが、経営立て直しのめどがつかないなら離れることは決まっていたのです。そこで、父の目指す方向性やクラブの状況を最も理解していた私がジャパネットメディアクリエーションの社長を辞めて、クラブの社長に就任することになりました」

「私自身、長崎に拠点を移すことは当初はとて考えられませんでした。でも、約3年間、クラブの広報・運営関連の仕事をしている中で、クラブへの愛着がわいたこと、そして子どもの頃からの夢である平和に対する貢献ができる仕事だということもあって、覚悟を決めたのです」

V・ファーレン長崎は、長崎県全域をホームタウンとするJリーグクラブだ。Vには、勝利を意味するポルトガル語Vitória (ヴィトリア)、平和を意味するオランダ語Vreda (ヴレーダ)、航海を意味するオランダ語Varen (ファーレン)、多様性を意味するポルトガル語Variedade (ヴァリアダーデ) ——という意味が込められている。「原子爆弾の被害を受けた人類最後の都市をホームタウンとするスポーツクラブとして平和の大切さを積極的に発

長崎のいいところ

「人」

長崎県全体で考えると、とにかくいい人が多いことです。愛情深く、人と人とのつながりを大事にする。それがテクニク的ではなく、心底気質としてあるような気がします。そういう側面を、クラブの理念として大事に守りたいと思っています。

信すると共に、国際文化交流を通して次世代に平和教育を行なっていきます」(クラブのWebサイトより)

そして、高田さんも「小学校などで学んだ平和学習を通して、物心ついたときから原爆の恐ろしいシーンが焼き付いていて、まだ米ソ冷戦時代でもあった小学生の頃は、いつ第三次世界大戦が来るかと恐れていた」という。「その記憶がずっと残っていて、とにかく戦争のない世界を作ることを考えていました」

「ただ、例えば国連を目指すとか、国際関係論を専攻するとかは考えず、人々が戦争のない世界を望む考えを持つにはどうしたらいいのか、ということを考えていました。だから教育や哲学により興味を持ったのだと思います。それは、今のスポーツの世界にも通じるし、長崎の平和の意味にもつながっていると思います。スポーツは戦いではありますが、根底には仲間や戦う相手へのリスペクトがあります。そして、スポーツができることそのものが平和の証だと思うのです。被爆地として世界に知られている長崎という街を、サッカーでも有名にして、この平和の願いを世界に届けたいと強く思っています」

A_People 入江杏 (23 ID79)

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

入江杏さん (ID79) は世田谷事件の遺族。
世田谷事件とは2000年末に起きた未解決事件で、
入江さんは幼い姪のいなちゃんと礼くんを含む妹一家4人を失った。
取材にあたり、記者は亡くなったいなちゃんと同じ幼稚園だったこと、
2歳年長のいなちゃんがクラスのまとめ役、
バレリーナ姿も憧れの的だったことを入江さんにまず伝えた。
今年は事件から20年の節目の年。
事件が未だに解決しない中、一貫して事件のことやグリーフケアについて
発信されている入江さんに取材することで、同窓生たちに活動を
知ってもらうと同時に、事件や「グリーフケア」について考え、
目を向けてもらうきっかけになれば、と考えての取材依頼だった。
記者が想像していた事件遺族のイメージとは違い、
思いがけず、フランクに接する入江さんとの話は多岐に及んだ。

文：滝沢貴大 (本誌)

「悩み多かった」ICU時代

入江さんは東京都出身。小・中・高とキリスト教系の女子校に通い、1975年にICUに入学した。人文科学科で英文学を専攻し、卒論ではシェイクスピアを扱った。

大学時代について、入江さんは「何をしたいかはっきりわからない、悩み多き学生時代でした」と語る。「なんのために生きているんだろう。自分だけが幸せになるんじゃないかって、どうすれば世の中がもっとよくなるんだろう。そんなことを考えても、なかなか答えが出るはずもないんですが」。専攻とは別に、心理学にはまり、ユングやアドラーの著作に没頭した。後年本格的に出逢うことになる、「喪失」と「再生」についての著書などにも親しんでいたという。入江さんはこう続ける。「迷い、哲学的なものにひかれたこの時期があったことが、その後大きな悲しみに出会ったときに糧になってくれました」

事件発生

海外でレーシングエンジンのデザイナーとして働く夫に随行し、足掛け8年の英国生活から帰国した途端、事件に遭遇。愛する妹一家の命を突然、何者かに奪われたばかりではない、隣地に住む妹一家が事件に巻き込まれたことにより、今まで築き上げたものが破壊されてしまった。事件は連日大きく報道され、メディアスクラムの中で、入江さん一家は引越しを余儀なくされた。当然、人生は大きく変化した。事件とその後の過酷な日々。事件発生直後の目撃と恐怖、捜査とマスコミ取材の嵐に巻き込まれた疲労と困惑と不安。捜査への協力だけで毎日が過ぎていき、ほとんど引きこもり状態だったという。

グリーフケアの学びへ

学生時代から関心が深かった「グリーフ

ケア」と入江さんが、事件後、出逢い直すきっかけとなったのは、ノンフィクション作家の柳田邦男さんを報道関係者から紹介されたことだという。事件からまだ半年余りしか経っていない2001年7月、「関係性の喪失」の危機に瀕していた時だった。「柳田さんは、自死されたご子息について語り、涙されたんです。正直驚きました。その柳田さんの姿に接して、『悲しんでもいいんだ』と感じました」と入江さんは話す。

「グリーフ」とは、喪失に伴う深い悲しみ、悲嘆、苦悩を示す言葉。「悲しんでもいい」という呼びかけは「グリーフケア」の大切なメッセージだという。様々な「喪失」を体験し、グリーフを抱えた方々に、心を寄せて、寄り添い、ありのままに受け入れて、その方々が立ち直れるように支援すること、と定義されるグリーフケア。事件後、改めて入江さんは、グリーフケアの学びへと向かう。

絵本の誕生と「悲しみを生きる力に」

悲しみをありのままに受け入れるのは容易ではなかった。それでも、6年の歳月を経て、亡くなった4人の生きたく日々を辿るグリーフワークを通して、入江さんは再生へと向かう。

状況が変わったのは2006年。妹さん一家4人の七回忌にあたるこの年、絵本『ずっとつながってるよーこぐまのミシュカのおはなし』（くもん出版）を出版し、被害者遺族であることを世間に公表した。絵本では、妹さん一家の幸せな日常と、突然の別れを記した。「ミシュカ」とは、姪のいなちゃんと甥の礼くんが大事にしていたクマのぬいぐるみの名前。「いなちゃん (NINA)」と「礼 (REI)」を組み合わせた「入江杏」というペンネームは、このときに生まれた。

IRIE, Ann

1979年、人文科学科卒。世田谷事件の被害者、宮澤泰子さんの実姉。「ミシュカの森」主宰。上智大学グリーフケア研究所非常勤講師。世田谷区グリーフサポート検討委員。著書に岩波ジュニア新書『悲しみを生きる力に～被害者遺族からあなたへ』など。



ペンネームの下、文筆活動に入り、様々な「グリーフ」の現場から声なき声を聴き取っていく。2013年に『悲しみを生きる力に～被害者遺族からあなたへ』（岩波ジュニア新書）を出版したのを契機に、同じタイトルで、全国の学校、行政などで講演を続け、グリーフケアの啓発に努めるようになった。

「ミシュカの森」の活動と「グリーフケアの啓発」

事件発覚から6年経った2006年の年末、事件や妹さん一家をいたみ、「悲しみ」について思いをはせる会を「ミシュカの森」と題して開催するようになった。様々な苦しみや悲しみに向き合い、共感しあえる場をつくることで、「ミシュカの森」を犯罪や事件と直接関係のない人たちにも、それぞれに意味のある催しにしたいと語る入江さん。その思いが、共感と共生に満ちた社会につながっていけばと願っている。報道の文脈では、事件は点の出来事としてのみ扱われがちだが、事件後も悲しみは絶えることがなく続く。「グリーフケア」も点が線となり、さらに面となって、広がっていく、と入江さんは話す。

「ミシュカの森」の活動の継続と広がりの中で、非常勤講師を務める上智大学グリーフケア研究所の修了生のサポートも得た。今年は、朝日カルチャーセンター新宿と一緒に「グリーフケア」連続講座も開催。講座では、「悲しんでいい。『悲しみ』は『愛(かな)しみ』だから。誰かの悲しみに気づい

てそっと手をさしのべて」と語りかけているという。

「学生時代、『自分だけが幸せになるんじゃないかって、どうすれば世の中がもっとよくなるんだろう』と考えて答えが出なかったが、グリーフケアを通して、答えにたどり着いたのかもしれない」と入江さんは話す。

今後の活動と展望

今年中には、これまでの「ミシュカの森」の講演会から、柳田邦男さん、若松英輔さん、星野智幸さん、平野啓一郎さん、東畑開人さん、島菌進さんの講演と対談を編んだ新書を出版する予定だ。当事者が多様な知見に触れ、地域との協働のネットワークの中から、回復していく「グリーフケア」の一冊だ。ステレオタイプの被害者遺族像を離れ、生み出された言葉の数々が、心の中に錨を下ろしてしまった悲しみに風穴を開け、悲しみを抱えた人への励ましになることを願っている、と入江さんは話す。

「人生、必ずしも順風満帆ではないですよ。喪失体験は誰にでも訪れますが、悲しみも苦しみも糧にならないわけじゃないと伝えたいです。グリーフケアは悲しみからの学び。『グリーフ』の肯定的な側面に近年、光が当てられるようになってきました。新型コロナウイルスによるパンデミックで、世界が悲しみに瀕する今、グリーフを通してこそ得られる経験の次元を大切にしたいと思っています。グリーフケアは私にとっての大きな励ましです」

お邪魔します! あのメジャー

第20回 言語教育

半田淳子教授、藤井彰子准教授

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回のメジャー紹介は、言語教育を取り上げます。

「国際平和をめざし、異言語・異文化の交流・共存を促進するための橋渡しとなる人材を養成する」ことをゴールとしているICUの言語教育は、日本語教育と英語教育を必要不可欠な柱としていることを大きな特徴としています。

今回は、日本語教育の観点から半田淳子教授に、英語教育からは藤井彰子准教授にお話を伺いました。

文・写真: 谷澤聡 (本誌)



HANDA, Atsuko
国際基督教大学 教授

モナッシュ大学大学院博士課程修了。2005年よりICUに着任。専門は国語教育、日本語教育、日本近代文学で、ここ数年は国際バカロレアにおける「言語A」に関して研究を発表。日本語教育研究センター長、日本語教育課程主任、ICU教養学部副部長などを歴任。著書に「国語教師のための国際バカロレア入門」(大修館)があり、今秋、続編を刊行の予定。

FUJII, Akiko (39 ID95)
国際基督教大学 准教授

ジョージタウン大学博士課程修了。国際基督教大学教養学部卒。第二言語の習得・学習プロセスや、英語教育における教授法の理論と実践などを主とした言語教育を専門とする。2018年にICUの新規プログラム「B教員養成プログラム」委員長に選出され、プログラム推進を担う。

言語教育を学ぶ

半田: 言語教育メジャーは、教師を目指すことだけが目的ではありません。例えば、英語に興味がある学生にとっても選択肢になります。ほかの大学では、日本語教育、国語教育、英語教育、バイリンガル教育など、専門ごとにもう少し縦割りになっていることが多いですが、ICUでは一つの言語教育メジャーに入っていて、細かくは分かれていません。現在、藤井先生は基礎科目を担当してくださっていて、私は主に教職関係の科目を持っています。

1、2年生で履修する基礎科目「言

語教授法原論」や「教授用言語学」は、言語には関係なく共通しており、日本語教育や国語教育、英語教育を問わず履修します。リベラルアーツ教育を通じて、広く色々なことを学んだ学生が、卒業していずれ教壇に立つことには、非常に大きな意味があると思います。日本語教育の場合、学生のメジャーは様々で、学生が言語教育以外のMCC(メディア・コミュニケーション・文化)や社会学、国際関係学をメジャーとして選ぶこともあります。自然科学系が専攻でも、日本語教師の仕事に興味があり、教職課程を取るケースもあります。

藤井: 英語教育の場合でも、英語に興味がある学生が言語教育を通じて教科教育の学びを深めることもあります。学問としての言語教育や言語習得、バイリンガリズムなどを学びたいという学生もいます。また、教職課程をとる学生には、言語教育メジャー以外にも、文学やMCC、教育学や経済など、さまざまなメジャーの人もいます。

言語は私たちの生活のあらゆる場面と深く関連していますので、言語教育の研究対象は学校教育、脳科学、社会学、人類学、政治、歴史など幅広い分野と深く関連しています。中でも今個人的に注目していることの一つは認知

科学と言語教育の接点です。外国語を習得していく時に頭の中で何が起きているのかという視点です。

今は脳科学の研究も発展してきていますし、学習科学や学習理論が学校教育に与えられる示唆が今までになく注目されています。言語教育の分野でも認知科学と連携し、第二言語の学習過程をさらに解明していき、アクティブ・ラーニングなど様々な学習方法がどのように役に立つのかを科学的に証明していくことが求められていきます。

半田: 教員を目指す場合や、卒論研究や大学院での研究を進める場合であっても、ELAやJLPをはじめ言語教育は

《ICU 同窓会の皆様へ》 三井住友トラスト VISA ゴールドカード 年会費を大幅割引!

VISA ゴールドカード



通常年会費11,000円(税込)

2,750円(税込)

2年目以降も同額!

ロードサービス VISA ゴールドカード



通常年会費12,100円(税込)

3,300円(税込)

※家族会員年会費は1,100円(税込)です。

期間限定キャンペーン実施中

キャンペーン期間:2021年4月30日まで

期間中にご入会された方全員に
1,000円キャッシュバック!

※本会員・家族会員同時に
ご入会の場合は、
2,000円キャッシュバック



★ ご家族の方でも本会員申込みOK!

★ 同窓会にもメリット!!

カード利用額の一部が同窓会に還元!

★ ゴールドカードの主なお役立ちサービス

*海外・国内旅行傷害保険 *お買物安心保険

*空港ラウンジサービス *ワールドプレゼント

*ロードサービス(ロードサービスVISAゴールドカードのみ)

など

※ご入会にあたっては、弊社所定の審査がございます。

申込書請求先 (MAILの方は、ICU 同窓会員であることに加え ①お名前 ②ご住所 ③お電話番号 をご送信ください。)

TEL 0120-370-070

MAIL Moushikomi@smtcard.jp

⇒⇒



三井住友信託銀行グループ
三井住友トラスト・カード

お電話受付時間:平日 9:00~17:00(土・日・祝日・12/30~1/3 休)

営業推進部

(取得した個人情報は VISA カード入会申込書を送付する事に限定いたします。)

専門科目での学びを活かすことができます。そういった意味で、言語教育はリベラルアーツに適したメジャーだと思います。

ICUではELAやJLPで学んだことが、3年生以降の自身のメジャーを決めるから活かされる点が素晴らしいです。学生は単に言語を習得するだけでなく、批判的思考力なども学びます。異なる観点に立って物事を分析するといった学びを積んだ学生は、学問を深める上での基礎が身につけており、教師の側からすると授業そのものがやりやすいです。なにより、バイリンガル教育がベースになっているリベラルアーツ教育は他大学にないのではないのでしょうか。異なる言語的背景を持つICUの学生が、中学生や高校生に英語や国語、そして日本語を教えたら、きっと想像以上に豊かな学びが生まれると思います。

当たり前が当たり前ではない

藤井：学生たちには、それぞれの言語的なバックグラウンドがあります。日本で英語を勉強してきた学生もいれば海外で英語を習得した帰国生がいます。最近では、日本語と英語の両方が外国語である、という学生も増えています。

日本で育った学生がELAの授業を経験し、「こんな英語の学び方があるんだ！」と感ずることが、英語教育を考えるきっかけになることもあります。一つのクラスの中だけでも、様々な視点からのアイデアが飛び交いますし、教職の授業で、学生は色々なアプローチからの模擬授業を考えてきます。みんなが違う経験をしてきた環境下での学びはとても刺激的なものとなります。

言語教育を通じて得られる学びは、どのような進路であっても活かされると思います。基本的にICUで目指している学びは、考える力などであり、知識だけに留まりません。たとえば、学生が理論を勉強し、実際の言語学習の現象を調査し、それが理論とどう噛み合うのかを分析して発表します。これ

は、どこでも応用できることです。英語や日本語の教育に関わる場面だけでなく、さまざまなことに通じると思っています。

半田：2つ以上の言語に深く関わり、多様な文化的背景の学生たちと接する中で、言語的な感覚が磨かれるのだと思います。「こう伝えたらいいんじゃないか」とか「どうしたら、上手くいくのか」「こういう時は、どうしたらいいのか」といったことが磨かれ、鍛えられていきます。

藤井：言語学習や言語習得に関して今まで当たり前だと思っていたことについて、違う立場から見たら新しいことに気づく。これは、学生にとって楽しいだろうなと思います。言語はとても身近なもので、皆が使うものです。当たり前前のことを改めて勉強すると新たな発見があって面白いと思います。

半田：私が学生だった頃、日本語教育という専攻はありませんでした。ICUにはありましたが、少なくとも他大には無く、国語教育や英語教育をやる方が日本語教育を担当することが普通でした。私は国語教育を選び、将来的には日本語教育に関わりたと思っていたのですが、国語と日本語では、言語学的にはJapaneseですが、教壇に立って「日本語」を教えるときに非常に苦労しました。国語教育では簡単で当たり前前のことが、日本語教育では複雑で難しいということが数多くありました。そういった経験から、自分の母語だけれども「当たり前が当たり前ではない」ことに改めて気づきました。そこには、文化の違いや、考えかたの違いなどもありました。教室そのものが国際的な感じで、失敗は多くしました。こういう聞き方するとダメなんだな、など。以来、授業の際の自らの発言をより意識するようになりました。日本語のクラスには、色々な意味で多様性があり、発見があり、日本語教師という仕事はとても楽しいです。

藤井：お互いの当たり前が違うということは、学生たちが一番感じているの

ではないかと思います。日本で英語を頑張ってきて、自分ではできると思っていたけれども、ICUに来てみたら「こんなに英語ができる人がいるんだ」と思う学生がいたり。逆に、あまり英語が得意でなくても、積極的に話をして他の国の学生を目の当たりにしたりします。帰国生であっても、英語が得意だと思っていたのに、文法については上手く説明できないことがあります。ただ、他の学生と自分を比較して劣等感を感じるのではなく、学生同士がポジティブに刺激しあってほしいです。

藤井：ICUを卒業して教師になるのであれば、ICUで学んだからこそ、英語教育に貢献できることがあってほしいと願っています。少し違う発想や、疑問に思うことをより良い方向に変える勇気や発想を持ってほしいです。例えば、良いとされている授業モデルをお手本とし、デリバリーを訓練して実践することもできますが、そういった型を超え、少しでもクリエイティブに考え、社会に貢献できる新しい何かを編み出していくことを期待したいです。

半田：ELAには男女問わず幅広い国籍の先生方がいらっやあって、そうした先生方の授業を見せていただく機会が多くあったんですけど、同じレベルのクラスでも、先生によってやり方が全然違います。そういう違いを、直に経験できる学生が素晴らしい。その経験は、自分が教えるときにも役立つだろうと思います。ミーティングのマネジメントをする際や、異なる意見の人とのすり合わせ、困難な問題の解決策を模索する時なども授業での経験が役に立ちます。

今後の展望とICU生への期待

藤井：ICUは英語教育の評判が高いので、周囲から期待されている点が多いと思います。卒業生で活躍されている方が多くですし、英語の教員になることに不安を感じ、踏み出せない学生が多くいます。そのような学生には、自

分のできることは必ずあると激励したいです。

半田：2019年4月から国際バカロレア（以下IB）教員養成プログラムが始まりました。これは、通常の教員免許に加え、所定の単位を履修した学生に、IBの教員認定証が与えられるというプログラムです。初年度は、約9人が授業を取りました。これは他の大学に比べても多い規模だと思います。IB教員養成プログラムを取っている学生には、そもそも自身がインターナショナルスクールの出身者だったり、海外での教育に興味がある学生が少なくありません。

藤井：IBの理念は、ICUのリベラルアーツの教育理念に非常に近いと思います。世界平和に貢献する人材、心を開く人、探求できる人など。批判的に物事を多角的に考えられる人というのを目指しているのですが、考え方が共通しています。リベラルアーツと重なる点が多く、ICU生にとっては、入学からずっと学び、経験して来た考え方なので、「こういうことだね？」といえはすぐに伝わります。IBは、世界中で注目されている学び方を多く取り入れています。このIB教育を学ぶことで、授業を組み立てる発想も変わっていきます。とても興味深いので、私も影響を受けており、自分の授業でも実践している部分があります。半田：今は文科省も注目していて、新しい学習指導要領は、かなりIBを意識した内容になっていますし、10年後はもっとIB寄りになると思います。また、2019年6月に「日本語教育の推進に関する法律」が可決しました。ICUは戦後いち早く高等教育における日本語教育に着手した大学ですが、今後は大学レベルだけでなく、学齢期にある児童生徒や生活者の方々の日本語教育についても貢献して欲しいと願っています。

藤井：ICUでIB教育について勉強した学生が、卒業後に日本の学校やインターナショナルスクールなどでリーダーシップを発揮していくことを期待しています。

自然と遊ぶ、仲間と遊ぶ 世界中に友だちつくろう！

多言語自然キャンプ

参加者募集

小学生～大学生を中心に、世界中から集まる人たちと一緒に大自然の中、多言語・多世代で過ごすプログラムです。国や文化を越えて友情が育まれます。

【国内キャンプ】(3泊4日・長野県 飯山市)

- 雪の学校
3月下旬。小3～大人。雪の活動と多世代・多言語交流。
- Nature Camp
8月下旬。0歳からのご家族で参加できます。
夏山体験と多世代・多言語交流。

【海外キャンプ】(1週間前後 8月開催。中1～大人)

- アジア青少年多言語自然キャンプ & ホームステイ
タイでの自然体験と現地家庭でのホームステイ。
- アジア青年多言語宿泊 & ホームステイ
上海の研修施設での合宿と現地家庭でのホームステイ



Multilingual Natural Immersion

どんなことばにも開かれた心を育てる



多言語を学ぶ意味

大和田康之(国際基督教大学1期生、レドランズ大学名誉教授)

私がこれから担う真のリーダーシップについて必要だと思うのは「多言語を話す」というスタンスです。多言語を話すということは、「違ったことば、価値観を持った人を自分の中に受け入れる」ということです。それは自分が人間としてより豊かになることです。ヒippoではまず相手の言語を大切にしようというスタンスで手言語を学んでいます。そんな世界がひろがっていくことに、ことばを学ぶことの本質的な意味があるのではないのでしょうか。

● お問い合わせは、下記フリーダイヤルまたはホームページから

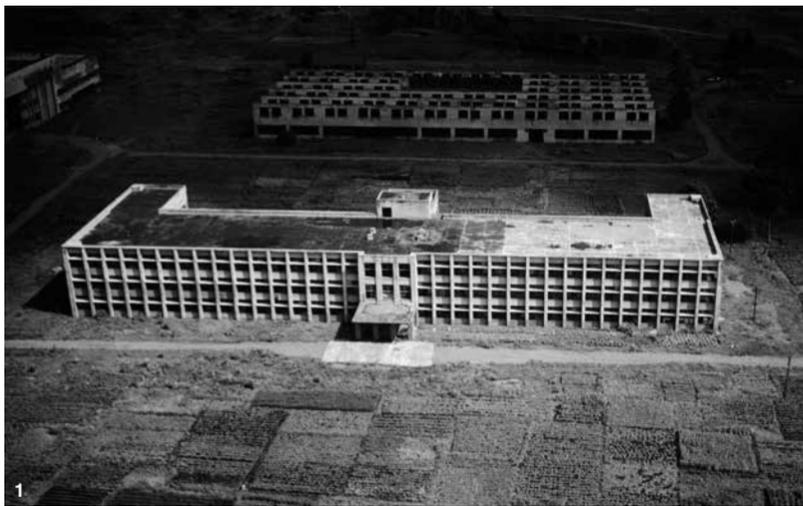
From the University

大学のページ

当ページでは、前号まで大学事務部署紹介を連載していましたが、今号からはICUアーカイブスが連載を担当します。皆さまが在学されていた当時の歴史やこれまで知らなかったICUについて知る機会にもなるかと存じますので、ぜひご一読ください。

A series of articles to introduce university offices has been running on this page in the past several issues, but starting from this issue, ICU Archives & Special Collections will be offering a new series. The series will provide an opportunity to find out in depth about the history of ICU, perhaps about the times when you were a student or things you've never heard of before. We hope you enjoy it.

文・松山龍彦 (ICUアーカイブス) Text: Tatsuhiro Matsuyama (ICU Archives)



1 中島飛行機の跡地に広がる畑。 2 敷地内の田園。 3 「国際基督教大学敷地」と書かれた地図。 4 カトリック系社会福祉法人の所有地だった那須キャンパス。 5 那須キャンパスの太陽光発電設備。

3つのキャンパス、3つの物語

みなさん、はじめまして。今回からこのページはICUアーカイブスが担当させていただきますことになりました。アーカイブスは現在図書館の中の一部署で、大学の歴史に関する数多くの文書・写真などが保存されています。それらの中から得た情報をもとに、毎回決められたテーマに沿って書き進めていきたいと思います。

はじめに

第1回は、ICUのキャンパスに関するお話です。現在ICUは3つのキャンパス(校地)を持っています。教学活動のほとんどが行われる三鷹キャンパス以外に那須と軽井沢に校地を持っています。よく考えてみると当然の話なのですが、いずれのキャンパスもICUが手に入れるまでは他の個人・団体が所有していました。三鷹キャンパスが航空機メーカー中島飛行機株式会社のものであったことはICU関係者ならご存じと思いますが、那須や軽井沢についてはご存じない方も多いのではないのでしょうか。これら3つの校地の来歴を紐解いてみましょう。

三鷹キャンパス

中島飛行機の敷地だった現在の三鷹キャンパスをICUが手に入れたのは、1950年。その前年の1949年に日米のキリスト教関係者たちがYMCA 東山荘に一堂に会したいわゆる御殿場会議で大学設置のための憲法ともいえる「寄附行為」が採択されICUの骨格が完成したのですが、用地の選定はそれに先立つ1947年にはすでに始まっていました。当初は日本の象徴である富士山と太平洋を望む沼津市や兵庫県西宮市など10か所以上の候補地がありました。大学建設委員会の主要メンバーであった山本忠興・斎藤惣一らは精力的に候補地を訪問しましたが、遠くに富士を望む武蔵野の大地にある中島飛行機跡地こそが新しい大学に相応しい土地であるとする山本の強い要望が通る形で決定されました。「40万坪は決して十分ではないが、調布飛行場の接収解除を待って購入すれば100万坪になる。大学を中心に国際組織の建物を配置した国際センターにするには十分だ」と豪放磊落な山本らしい言葉

を残しています。委員会の主な活動拠点であった東京女子大学から直線距離で6kmという立地も決定の要因だったと思われます。しかし、中島飛行機が政府や軍部の力を借りて地元農家から土地を買収して研究所を作ってから10年足らずであったため、中島の撤退した跡地には戻ってきた住民たちが畑を作っている状況でした。小作農を優先した戦後の農地改革政策もあり、大学設置委員会は地元三鷹市の農地委員会やこの地に戻りたい地元住民たちとの困難な折衝に直面することになりました。離作者や転出者への補償金支払いや元住民の雇用とともにGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)への請願により農地をいったん国が買い上げ、大学へ売却するという措置も使って現在の三鷹キャンパスが形成されました。三鷹キャンパスが中島飛行機のものであったのはわずか10年足らずのことでした。それまでは、旧石器時代以来、小川と台地が形成する武蔵野の林に住まう人たちのものであったということを忘れてはいけないのです。

那須キャンパス

那須キャンパスは、栃木県那須郡那須町にあります。面積は約97万平方メートル以上あり、62万平方メートルの三鷹キャンパスよりも広い敷地です。2010年までは、クラブの合宿などに使われていたもので、在学時代の思い出としてマリア像の置かれていた八角堂の記憶のある方もいらっしゃるでしょう。しかし聖母マリア像はカトリック教会につきもの。なぜ超教派のICUの施設にこのような建物があったのでしょうか？この土地がICU那須キャンパスになる前、ここは慈生会というカトリック教会系の社会福祉法人の所有地でした。1886(明治19)年に来日した宣教師フロージャック神父を創始者とする慈生会の活動は、結核患者救済から始まり、現在では児童養護施設・障害者支援施設・特別養護老人ホームほかを運営しています。八角堂は慈生会が「聖マリアの山」の林間学校施設の一部として1954年に建てたものです。ICUがこの土地を手に入れたのは1977年。中近東文化センターへの土地売却益を

使ったことです。ICU那須キャンパスの使用が中止されたのは2011年3月。東日本大震災で建物やインフラに損傷を受けてのことでした。2020年5月4日、筆者は管理部に特別に許可をもらい、利用停止中の那須キャンパスを訪れました。管理人さんに案内してもらいましたが、10年ほどで道も分からなくなるほど草木が生い茂っており、自然の力強さを見せつけられました。願わくは、この豊かな自然がまたいつの日かICUのために役立てられますように(2015年から太陽光発電設備が導入され、那須キャンパス内の2か所で大学の収益事業として展開しています)。

軽井沢キャンパス

もう一つのキャンパス、軽井沢三美

荘はどのようにしてICUのものになったのでしょうか。この土地は戦前までは志立鉄次郎^{したち}という銀行家の所有地でした。鉄次郎は明治から昭和にかけて活躍した人物で、日本興業銀行総裁も務め日本代表として国際経済会議にも出席した人物です。軽井沢は、明治後半から外国人別荘地として知られていましたが、1910年代になると日本人政治家・実業家たちが次々に別荘を構えるようになり、鉄次郎も1914年後に旧軽井沢、愛宕山の麓に別荘を所有しています。鉄次郎の妻、タキ(滝子)は福沢諭吉の四女でしたが、軽井沢別荘地の開祖であるA.C.シヨウが兄姉の家庭教師であったことから聖アンデレ教会で洗礼を受け、後年YWCAの会長も務めた熱心なクリスチャンでした。鉄次郎夫妻は美保・や

な・三保・多代の四女に恵まれましたが、このうち三保、美保は若くして亡くなりました。記念のためにその二人の頭文字をとって、満州開拓者を支援するための「三美会」が1939(昭和14)年ごろ設立され、以前に取得していた信濃追分の土地(現在のICU三美荘)を三美会農園という研修施設にしました。鉄次郎は戦後まもなく没し、土地と施設は次女のやなとその夫である湯浅恭三(ICU第4代理事長。初代学長湯浅八郎とは直接の近縁ではない)を含む三美会理事たちの判断にゆだねられることとなります。志立鉄次郎の作った三美会農園は、その解散とともにICUの献学の理念に共感した湯浅恭三氏を経て、ICUへ寄贈されたのです。こうして1952年7月11日、三美荘が誕生しました。「三美」の名前

を残すことは、三保・美保の母であった志立(旧姓福沢)タキの強い希望だったのです。面積：54,500平方メートルの敷地に三木ハウスと新館の宿泊棟、テニスコートなどを擁する施設は、現在まで研修・合宿・保養のために使われています。

参考資料

佐藤大祐ほか「明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷」『歴史地理学』v.46-3, pp. 1-20

榊島榮一郎「ある土地の物語」(北樹出版、2019) 国際基督教大学新聞(1958年6月24日号)(ICUアーカイブス所蔵)

湯浅恭三「三美荘由来記」(ICUアーカイブス所蔵)

Three Campuses, Three Stories

Hello, everyone. ICU Archives & Special Collections will now take over this section of Alumni News. We are the department within ICU Library that holds numerous documents and photographs related to the history of ICU. From the information drawn from these records, we would like to write on specific topics for each issue.

Introduction

The first article is about the ICU campus. Currently, ICU has three campuses. Besides Mitaka Campus where most of our education and research activities take place, there are campuses in Nasu and Karuizawa. It is obvious that all three campuses had been the properties of other persons or organizations before ICU acquired them. While most of you may already know that Mitaka Campus used to be owned by an aircraft manufacturer, Nakajima Aircraft Company, you may have no idea about Nasu and Karuizawa. Let's look into the stories about how these three properties came to be our campuses.

Mitaka Campus

ICU acquired the current Mitaka Campus from Nakajima Aircraft Company in 1950. The year before, in 1949, the ICU's founding principles as well as a fundamental education plan were laid down by the Japanese and North American Christian leaders who gathered at YMCA Tozan-so, so-called "Gotemba Meeting." However, selection process of the university site had already started before that in 1947. At first, more than ten candidate sites were considered, including Numazu City which boasts majestic views of Mt. Fuji, the symbol of Japan, and the Pacific Ocean and Nishinomiya City in Hyogo. Main members of the Organizing Committee, including Tadaoki Yamamoto and Soichi Saito energetically visited the sites, and it was decided on the former site of Nakajima Aircraft Company located on Musashino Plateau, where Mt. Fuji can be viewed in the distance. It was Yamamoto who strongly insisted that Mitaka was the most appropriate site for building the new university. "365 acres may not be large enough, but if

we also purchase the adjacent land now used as Chofu Airport after it is derequisitioned, the site combined will be over 900 acres in total. I suppose that should be enough for building a new international center with various international organizations arranged around the university" a comment typical of his bold and ambitious character. The fact that it was only about 4 miles away from Tokyo Woman's Christian University, the base for the Organizing Committee's activities may have been another factor for the decision.

It has only been ten years since Nakajima purchased the land from local farmers to build their research institution with the authority of the Japanese government and military. After the dissolution of Nakajima, the farmers returned to where they lived before and started farming, in consequence.

Against the backdrop of post-war farmland reform policies that emphasized the rights of peasants, the Organizing Committee was faced with difficult negotiations with Mitaka City's Agricultural Committee* and former residents who wanted to return to the site. The current Mitaka Campus finally became ICU campus by paying compensation money to farmers and residents who had to move out of the site and by hiring the former residents as employees. In addition, the Organizing Committee made a petition to the General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Forces (GHQ) and had the Japanese government purchase the land and then sell it to the university. Nakajima Aircraft Company owned the site only for a period of less than ten years. We should remember the fact that, until then, the site had been in the hands of the local inhabitants, the masters of the Musashino Uplands covered by woods and streams, since ancient old stone age.

Nasu Campus

Nasu Campus is located in Nasu Town, Nasu County in Tochigi, covering an area of more than 239 million acres, larger than Mitaka Campus, which is 153 acres. It was used for students' club camps and on other occasions until 2010. Some of you may remember

from your student days the Hakkakudo, an octagonal chapel holding a statue of Virgin Mary inside. Virgin Mary usually is a religious manner for Catholic churches. How come a Catholic Church icon came to ICU, which was supposed to be an inter-denomination university? Before the property became an ICU campus, it was owned by a Catholic-affiliated social welfare corporation named Jisei-kai. Founded by a missionary, Father Joseph Flaujac who arrived in Japan in 1886, Jisei-kai started by providing relief for patients with tuberculosis. Today, it operates various welfare facilities including orphanages, facilities to support handicapped people, and special nursing homes for the elderly. The Hakkakudo was built by Jisei-kai in 1954 as part of the Blessed Virgin Mary Camping School facilities. Later, ICU acquired this property in 1977 using the gain on sale of land to The Middle Eastern Culture Center in Japan. Use of ICU Nasu Campus was discontinued in March 2011 due to damages caused to the building and infrastructure by the Great East Japan Earthquake. I visited the suspended Nasu Campus on May 4, 2020, with a special permission from the Facilities Management Division. The janitor guided me through the property. In only a decade since the suspension of use of the facilities, the roads were already covered with such thick vegetation that they could hardly be distinguished, demonstrating the amazing vigor of nature. I could not help hoping that the rich natural environment will again be utilized for ICU one day. (Photovoltaic power generation facilities have been introduced at two locations on the property and operating as the university's revenue-generating business since 2015).

Karuizawa Campus

How did our third campus, Karuizawa Sanbiso become an ICU property? This land was owned by a banker named Tetsujiro Shidachi before the WWII. He was a prominent figure who held important positions in Meiji to Showa era as the President of The Industrial Bank of Japan. He attended the International Economic Conference as a Japan delegate. Karuizawa was a place known as a summer retreat for foreigners from the

late Meiji Era, but around the 1910's Japanese politicians and successful businessmen also started to build their summer houses one after another. Tetsujiro, too, built his house at the foot of Mt. Atago in around 1914. His wife Taki was the fourth daughter of Yukichi Fukuzawa. In her childhood, she was influenced by Alexander Croft Shaw who taught her elder brothers as a tutor, Taki became a devoted Christian and was baptized at St. Andrew's Cathedral and later served as the chair of Japan YWCA. A.C.Shaw was also known as a man who introduced Karuizawa to other foreigners. Tetsujiro and Taki were blessed with four daughters, Miho, Yana, Miho (second) and Tayo, but both Miho died young. In 1939, Tetsujiro established a company to support Manchuria colonists and named it "Sanbi-kai" in memory of his two lost daughters, taking the initial letters of their names. He founded a training facility, Sanbi-kai Farm on a land in Shinano Oiwake, where he had acquired earlier (current ICU Sanbiso). Tetsujiro died soon after the war ended and left the land and facility for his second daughter Yana and her husband Kyozo Yuasa (4th Chair of ICU Board of Trustees; he is not a direct relative to the first ICU President Hachiro Yuasa) and the other trustees of Sanbi-kai. Tetsujiro's Sanbi-kai Farm was then passed down to ICU by Kyozo Yuasa who deeply sympathized with the university philosophy. This was how Sanbiso was born on July 11, 1952. It was the strong will of Taki Shidachi (Fukuzawa) to maintain the name "Sanbi," taken from her two late daughters. With Miki House, tennis courts and other facilities in 13 acre land, Sanbiso continued to date as ICU's training and recreation site.

Reference materials:

Daisuke Sato, et al. "Meiji Taisho-ki no Karuizawa ni okeru Kogen Hishochi no Keisei to Besso Shoyusha no Hensen (Development of highland summer resorts in Karuizawa and trends in property owners during the Meiji and Taisho Era)." *The Historical Geography*, v.46-3 p.1-20. Eiichiro Kabashima. 2019. *Aru Tochi no Monogatari (A story of a land)*. Hokuju Publishing. *Kokusai Kirisuto Kyo Daigaku Shimbun* (ICU News), June 24, 1958. (ICU Archives & Special Collections) Kyozo Yuasa. *Sanbiso Yurai-ki* (The origins of Sanbiso). (ICU Archives & Special Collections)

From the Alumni House

アラムナイハウスから

パリ駅伝にチームICU

文：小川陽子 (37 ID93)



2018年の晴天とは打って変わり、2019年のパリ駅伝は冷たい雨の中の開催となりましたが、2019年もチームICUとして参加し、無事にタスキを繋ぐことが出来ました。

パリ支部の後援のもと、ICU卒業生とそのファミリーにJ-Jogging Club Parisから助っ人を一人お借りしてのチーム編成。あいにくの天候で昨年のタイムに追従なりませんでしたが、怪我もなく皆で気持ちよくゴールすることができました。42.195kmを3:31:28でゴール、全体1203チーム中、J-JOGGING ICUチームは554位でした。冷たい雨の中路上でICUの青旗を掲げてランナーに温かい声援を送って下さったICU同窓生の皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。

スポーツイベントへの参加は同窓会の活動としては少し異色なのかもしれませんが、親睦を深めるという点では他のイベントに負けていません。2020年は欧州の他都市からの参加者も募ろうか、ともくろみ中です。毎年、11月の第一日曜日に開催され、登録は8月ごろ行いますので、ご興味がおありの方、パリ支部のメールアドレスicuparis@gmail.comまでご連絡願います。欧州在住の同窓生の方方もいかがでしょうか？

ID83±3リユニオンのご案内

文：新村敏雄 (27 ID83)

ID83の仲間たちも、ほぼ全員が還暦を迎えた2020年に開催するつもりでしたが、現在の情勢を踏まえ、2021年の桜の時期にリユニオンを開催することで、準備を始めました。

開催日時：2021年4月3日(土曜日)

14:00～16:00

会場：ICU大学食堂

2次会あり：アラムナイラウンジ(学内アラムナイハウス2階)

今後の情勢によっては、日程変更もあり得ますが、スケジュールをご予定ください。ID83±3の友人たちへもお知らせください。

桜グッズに若狭塗の箸が加わりました

文：岩田岳久 (21 ID77)



ICUの桜並木の中で老朽化のためやむなく2016年に伐採された桜の木から若狭塗の箸ができました。

他の桜グッズ同様、代金1000円のうち10%の100円がICUの美しい桜並木を未来につなげるための資金として大学に寄付されます。

是非この機会にこの箸をご購入いただき、手に取るたびにあの桜並木を思い出してください。箸の長さは23cmです。同窓会事業部 桜リサイクルプロジェクト室。

猫のマグネット、パズル/NPO法人こまくさ工房とのコラボグッズ、同窓会ロゴの焼印入りの猫のマグネットとパズルです。数量限定商品ですのでお早めにお買い求めください。

マグネットの猫の座高は約6cm、各色税込200円。(色、向きについてはお問い合わせください) パズルは縦横約12cm税込700円。立てて飾ることもできます。

ご購入希望の方は、同窓会事務局(aaoffice@icualumni.com)までメールでお申込みいただくか(追って送料、代金などの振込先をお知らせいたします)、学内三省堂でお買い求めください。

湯浅八郎記念館がオンラインのギャラリーツアーを配信

文：具嶋恵(湯浅八郎記念館学芸員)



湯浅八郎記念館では4月14日より、特別展「よみがえる宮古島の祭祀 写

真家、上井幸子と比嘉康雄が写した記憶」の開催を予定していましたが、COVID-19の影響でやむなく中止となりました。

展示した主に1970年代撮影の白黒写真179点は、戦後沖縄の激動の時代にあって宮古島の人々が辛うじて守り伝えてきた祭祀の姿をとらえた貴重な記録です。多くは女性が神職を務め、中には島民以外はもちろん、集落内でも目にすることがタブーであった秘儀もありました。

本展は関係者の全面的な協力を得て準備を進め、ふたりの写真家の作品を並べて紹介するのは沖縄県外では初めてとなる予定でした。残念ながらオープンすることは叶いませんが、代わりにオンラインで展覧会をお楽しみいただけるよう動画を制作しました。共同主催者の藤田ラウンド幸世先生(G2011本学客員准教授)が、展示室を巡りながら知られざる琉球の精神文化を解説します。以下のアドレスよりぜひご覧ください。

https://subsites.icu.ac.jp/yuasa_museum/special_exhibitions.html
#special_exhibits_spring

ID79同窓会(2020年10月10日予定)の中止(延期)のお知らせ

文：ID79同窓会幹事 本山裕之(23 ID79)

Section毎の連絡ルートで2020年10月10日(土)に大学食堂で開催するとお伝えしていたID79の同窓会ですが、コロナ禍の状況が全くもって読めないことから誠に残念ですが、中止(延期)とさせていただきます。延期した開催時期は未定です。コロナ禍の状況が見えて来たらまたお知らせさせていただきます。皆様、およびご家族がご健勝であられることを心から祈念しております。

追伸：この掲示板をご覧になったかたでSection毎の連絡ルートを通じた同窓会開催案内を受け取られていない方は、是非連絡ルートを回復し、以下の宛先までご連絡いただけます。(連絡にはSectionを忘れずにご記入ください)

連絡先：icuid79reunion@gmail.com

同窓生向けメールサービス「@alm.icu.ac.jp」のご案内

2015年度から、大学では学生・教職員のコミュニケーションツールとしてGmail(@icu.ac.jp)が採用され、卒業する際に卒業生全員にアドレス(@alm.icu.ac.jp)が提供されるようになりました。2014年度以前の卒業生もこの卒業生用アドレス(@alm.icu.ac.jp)を無料でご利用いただけます。卒業生用のドメインは@alm.icu.ac.jp。大学などの高等教育機関向けであるac.jpのサブドメインです。是非ご利用ください。詳しくは、以下で。

https://www.icualumni.com/to_alumni/maillservice/

福利厚生プログラム ICU同窓会WELBOXのご案内

同窓会では、株式会社イーウェルが運営する「WELBOX」という福利厚生プログラムを導入しています。会員制リゾートホテル・ハーベストが利用できるほか、国内宿泊のお得なプラン、映画や東急ハンズの割引、ヘルスケア、保育サービスなど、多様な優待プログラムが準備されており、同窓会員本人だけでなく、兄弟姉妹や子、孫、祖父母まで利用することができます(2親等以内の家族)。

なお、終身会費をお納めいただけない方はWELBOXのご利用登録ができません。ご不明な点は、同窓会事務局までお問い合わせください。詳しくは、以下で。

https://www.icualumni.com/to_alumni/welbox/

事務局からのお知らせ

★ 広告募集！

本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円で承っております。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください

★ 原稿をお寄せください！

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWebサイトに掲載いたします。

★ 住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。aaoffice@icualumni.com

地方・海外にご転勤の際には支部をご紹介いたします。同窓会事務局までお問合せください。携帯の方はこちらからどうぞ：



★ ご協力をお願いします

大学の宣伝＝大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

STAFF

EDITOR IN CHIEF

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)

MANAGING EDITOR

松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS

鈴木 律 SUZUKI, Ritsu (23 ID79)
望月厚志 MOCHIZUKI, Atsushi (26 ID82)
池島広子 IKESHIMA, Hiroko (27 ID83)
神内一郎 JINNAI, Ichiro (33 ID89/G1992)
安楽由紀子 ANRAKU, Yukiko (40 ID96)
星川菜穂子 HOSHIKAWA, Naoko (40 ID96)
谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)
亀山詩乃 KAMEYAMA, Shino (54 ID10)
杉岡隆 SUGIOKA, Takashi (62 ID18)
滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)
水野愛子 MIZUNO, Aiko (62 ID18)

PHOTOGRAPHER

中島正之 NAKAJIMA, Masayuki

ART DIRECTOR

佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR

坂井健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

EXECUTIVE DIRECTOR

松島真理 MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)

PUBLISHER

櫻井淳二 SAKURAI, Junji (28 ID84)

cover photo: ICUアーカイブス提供
backcover photo: 同上

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみならずのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？ 企画、取材、執筆、撮影、編集進行等と一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいうれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

■大学・同窓会に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

<https://www.icualumni.com/>

大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>

JICUFWeb サイト <https://www.jicuf.org/>

■ ICU 同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX : 0422-33-3320

Email : aaoffice@icualumni.com

■ 同窓会広報部 (ALUMNI NEWS 編集部)

E-mail : aaoffice@icualumni.com

2020年度ICU祭中止のご案内

文：ICU同窓会事務局

10月17日(土)、18日(日)に予定されていたICU祭は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止することが決定いたしました。オンライン開催についても検討されましたが、ICU祭に関わってくださるすべての皆様に楽しんで頂くことが難しい点、オンライン開催においても感染のリスクは残る点を考慮し、中止となりました。

例年ICU祭両日に開催されていた「ICU祭の日の同窓会企画」(アラムナイカフェ、DAYトークなど)も残念ながら中止いたします。

一日も早く事態が終息に向かい、来年度はICU祭が実施できることを心から祈念いたします。

ICU祭および、ICU祭の日の同窓会企画の中止の詳細情報につきましては、同窓会Webサイトを御参照くださいませ。

NOTICE: ICU Festival 2020 is canceled.

(text: ICU Alumni Association)

The ICU Festival 2020 originally scheduled on October 17th and 18th is canceled in consideration for the prevention of the spread of the COVID-19. Consequently, all the alumni association related events at the festival are also canceled. Please check our website for details.

<https://www.icualumni.com/>

Save the date 第1弾 2020 ホームカミングはオンラインで単独開催

文：同窓会大学・募金部

例年、ICU祭と同時開催してきたホームカミング(大学・同窓会共催)は、10月17日(土)午後、オンラインで準備しています。テーマは「ICUの大学体育・スポーツ・キャンプ」(仮)、メインスピーカーは2020年度末にご退任のPE高橋伸先生。詳細は同窓会のウェブサイトやFacebookで随時ご案内していきます。ご期待ください。

DAY賞候補者をご推薦ください

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方(卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

※推薦は年間を通して受け付けておりますが、前年10月15日受け付分までを選考対象として翌年の桜祭りで受賞者を表彰します。

※受賞者は同窓会Webサイトで発表するとともに、アラムナイニュースでお知らせいたします。

※推薦および選考については公開されません。

※自薦・他薦を問いません。

※推薦方法 WebフォームからもDAY賞候補者推薦ができるようになりました！

<https://www.icualumni.com/activities/day/>

Webサイトの「DAY賞」のページから[推薦フォーム]に、あるいは[推薦用紙PDF]をダウンロードして、必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてにお送りください。

郵送/FaxまたはE-mailで受け付けております。

※必要事項

- ・推薦したい方の氏名と卒業年、あるいは在籍年(分かる範囲で)
- ・推薦理由(新聞記事などの客観的資料があれば併せてお送りください)
- ・あなた(推薦者)の氏名と卒業年
- ・あなた(推薦者)の住所・Tel・E-mailアドレス

※歴代受賞者名もWebサイトに掲載しております。



ICU同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX : 0422-33-3320

E-mail : aaoffice@icualumni.com

地敷建設大學基督教國際

